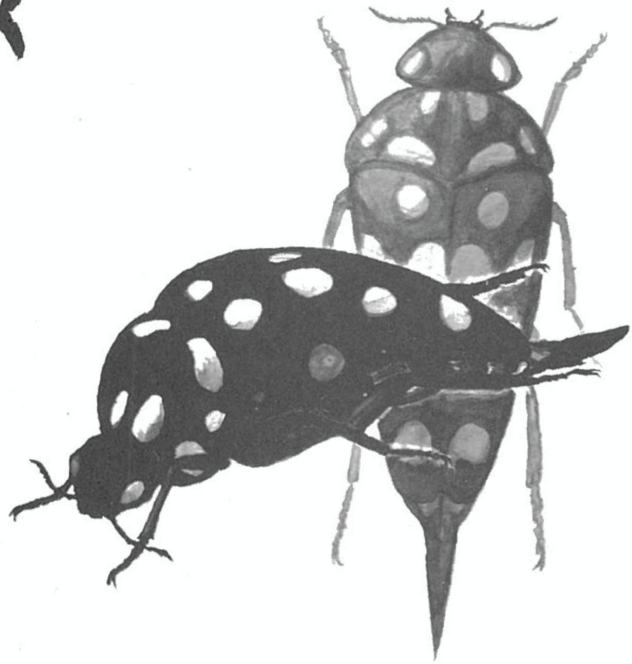


あまね



No. 1

1975年 6 月

日本鞘翅目学会

さ や ば ね No. 1 目 次

露木繁雄：富士山周辺のカミキリ..... 1

ふじたひろし：1973～1974年カミキリ界の総括.....16

編 集 後 記.....35

表紙題字：佐藤千枝 表紙カット（ヤエヤマキボシハナノミ）藤田 宏

富士山周辺のカミキリ

露木 繁雄

富士山が日本一高い山でありながら、最近までカミキリの調査はほとんどされていなかった。その理由は「火山でハゲ山」という単なる漠然としたイメージを、我々が持っていたためではないだろうか。

ちょっと考えてみればハゲているのは高い所だけで、カミキリの生息に適している1000m~1200mにかけては、日本でも有数の青木ヶ原という素晴らしい自然林もあり、生息環境としては悪いはずがなく、先入観の恐しさを今つくづく感じている。

関東のカミキリ屋が富士山を調べ始めるきっかけとなったのは、富士山のゴミムシやオサムシを調査して多くの成果を挙げていた須賀邦耀氏に負うところが大きい。彼にひっぱられて私が初めて富士山へ採集に入る以前、すでに彼は数10回も通って、カミキリもかなり注目すべきものを採集していた。

そしてカミキリ屋が富士山を徹底的に調べなくてはならない事件が起った。それは幸運にも私が初めて富士山を訪れたとき、すなわち須賀氏の案内でカミキリのベテラン小宮次郎、木村欣二、中村俊彦の各氏と採集に行った1970年6月28日の *Pidonia fujisana* (フジヒメハナ) の発見である。

発見のいきさつは別の機会にゆずるとして、その後多くのカミキリ屋が採集に入るようになり、私自身も何回か採集を試みたが、一口に富士山といっても非常に広く、わずかな調査で結論めいたことを書くのは好ましくないが、富士山北側と南側(表富士)とでは、ややカミキリ相を異にしているように思われるのは興味深い。

たとえば、現在までのところ、フジヒメハナは表富士だけで北富士では採集されていない。他に表富士だけ、あるいは表富士で圧倒的に多く採集されている種としては、ホソガタヒメハナ、ヒメハナ (*Pidonia mutata*)、フジコブヤハズ。逆に北富士のみ、あるいは圧倒的に北富士に多い種は、ヘリモンヒメハナ、イガブチヒゲハナ、ヒメヨツスジハナ、コウヤホソハナなどが挙げられる。

また短期間の調査の割には、かなり注目すべきカミキリが発見されている。フジヒメハナをはじめ、アラメハナ、フタスジカタビロハナ、ヘリグロホソハナ、ムナミゾハナ、イガブチヒゲハナ、ヒメヨツスジハナ、タケウチホソハナ、クロホソコバネ、オオホソコバネ、ヒメマルクビヒラタ、ムネマダラトラ、アカジマトラ、フジコブヤハズ、マルバネコブヒゲ、シロオビドイ、ゴイシモモブト、ヤツボシなどで、分布の東限や南限になっているものも多い。

いずれにせよ、場所的にも時期的にも未調査の部分が多く、また今回のリストは数人の限られた記録をもとに作成したため落ちも多く、今までに各種の記録をお持ちの方はもちろん、今後富士山に行かれて、新しい記録を追加された方は、ぜひご連絡くださるようお願いする。

富士山は調査してみるに充分値する山だということを一言申し上げておきたい。

1. *Prionus insularis* ノコギリカミキリ

17. VIII, 1969, 須走(木村欣二…以下 Ki): 25. VII, 1970, 御殿場(小宮次郎…以下 Ko): 3. VIII, 1974, 青木ヶ原(須賀邦耀…以下 S)

2. *Spondylis buprestoides* クロカミキリ
2. Ⅸ. 1973, 新吉田貯木場(Ki) : 4. Ⅷ. 1974, 新吉田貯木場(Ki, S, 露木繁雄…以下 T)
3. *Cephalallus unicolor* ツシムナクボカミキリ
4. Ⅷ. 1960, 山中湖(Ko)
4. *Arhopalus rusticus* サビカミキリ
4. Ⅷ. 1960, 山中湖(Ko) : 4. Ⅷ. 1974, 新吉田貯木場(Ki)
5. *Megaseum quadricostulatum* オオクロカミキリ
18. Ⅷ. 1974, 富士林道(Ki, S)
6. *Aseum punctulatum* ヒメマルクビヒラタカミキリ
14. Ⅵ. 1970, 表富士(S) : 4. Ⅷ. 1974, 滝沢林道(T)
7. *Aseum striatum* オオマルクビヒラタカミキリ
28. Ⅵ. 1970, 表富士(Ko) : 16. Ⅶ. 1971, 表富士(T)
8. *Tetropium castaneum* トドマツカミキリ
23. Ⅵ. 1974, 滝沢林道(S)
9. *Distenia gracilis* ホソカミキリ
25. Ⅷ. 1970, 表富士(Ko) : 2. Ⅸ. 1973, 滝沢林道(Ki) : 3. Ⅷ. 1974, 大室山(Ki)
10. *Rhagium pseudojaponicum* ニセハイイロハナカミキリ
23. Ⅵ. 1974, 滝沢林道(S)
11. *Sachalinobia koltzei* アラメハナカミキリ
11. Ⅷ. 1971, 表富士(Ki) 1 ♀
表富士周遊道路1700mにある駐車場の近くの、針葉樹と思われるボロボロになった立腐れの木より得られた。緯度から見ると南限の記録である。
12. *Stenocorus caeruleipennis* フタコブルリハナカミキリ
18. Ⅵ. 1967, 西湖付近(高桑正敏) : 14. Ⅷ. 1971, 須走(S, Komatsu)
13. *Toxotinus minutus reini* モモグロハナカミキリ
2. Ⅷ. 1972, 表富士(Ko)
14. *Pachyta erebia* キベリカタビロハナカミキリ
17. Ⅷ. 1969, 表富士(Ko) : 2. Ⅷ. 1970, 表富士(Ki) : 10. Ⅷ. 1974, 富士林道(Ko)
15. *Evodinus bifasciata japonicus* フタスジカタビロハナカミキリ
29. Ⅴ. 1972, 表富士(Ko) 1 ♀
表富士周遊道路の富士宮側料金所(1450m)より、富士宮側へやや下った地点を飛翔中のもの。富士山にはヤマシクヤクの花もあり、今後の調査が待たれる。
16. *Gaurotes doris* カラカネハナカミキリ
17. Ⅷ. 1969, 須走(Ki) : 11. Ⅶ. 1971, 表富士(T) : 4. Ⅷ. 1974, 滝沢林道(T)
17. *Lemula decipiens* キバネニセハムシハナカミキリ
- Ⅶ. 1970, 表富士(S)
18. *Lemula nishimurai* アカイロニセハムシハナカミキリ
- Ⅶ. 1970, 表富士(S)

19. *Le m ula rufithorax* ビックニセハムシハナカミキリ
VI, 1970, 表富士(S)
20. *Acmaeops minuta* ヒナルリハナカミキリ
28. VI, 1970, 表富士(Ko, Ki)
21. *Pidonia grallatrix* オオヒメハナカミキリ
17. VII, 1969, 須走(Ki): 28. VI, 1970, 表富士(Ko, T)
22. *Pidonia discoidalis* キベリクロヒメハナカミキリ
28. VI, 1970, 表富士(Ko, T): 2. VII, 1970, 表富士(Ki)
23. *Pidonia maculithorax* カクムネヒメハナカミキリ
17. VII, 1969, 須走(Ki): 28. VI, 1970, 表富士(Ko, T)
24. *Pidonia matsushitai* ヘリモンヒメハナカミキリ
18. VI, 1967, 西湖付近(高桑): 27. VI, 1971, 青木ヶ原(T): 25. VII, 1972, 青木ヶ原(Ki): 3~4, VII, 1974, 青木ヶ原(Ki, S, T)
前胸が黒化して、前後両縁のみ黄褐色となる個体がほとんどで、四国に分布する *P. matsushitai shikokuana* シコクヒメハナに極似する。表富士ではほとんど採集されず、2頭ほど得られているとのことだが、筆者はまだ確認していない。本州では青木ヶ原周辺と愛鷹山、静岡市北部の真富士山で得られているだけで、通常の型との関連やシコクヒメハナとの関係など非常に興味深く、今後の調査・研究を待ちたい。
25. *Pidonia semiobscura* ホソガタヒメハナカミキリ
28. VI, 1970, 表富士(Ko, Ki, T)
北富士では採集されていない。
26. *Pidonia mutata* ヒメハナカミキリ
28. VI, 1970, 表富士(Ko, Ki, T)
北富士では採集されていない。
27. *Pidonia signifera* ナガバヒメハナカミキリ
28. VI, 1970, 表富士(Ko, Ki, T): 25. VII, 1972, 青木ヶ原(Ki)
28. *Pidonia fujisana* フジヒメハナカミキリ
28. VI, 1970, 表富士(Ko, Ki, T, S, 中村俊彦)
表富士周遊道路の1600~1700m付近で、6月下旬から7月上旬をピークに、かなり得られる。8月上旬まで出現しているがごく稀である。北富士では得られていないが、その後周辺部を調査したところ、静岡県安倍峠と神奈川県丹沢山塊の檜洞丸岳付近で発見された。
29. *Pidonia insuturata* ヨコモンヒメハナカミキリ
4. VII, 1974, 滝沢林道(T)
30. *Pidonia similima* ニセヨコモンヒメハナカミキリ
17. VII, 1969, 須走(Ki): 28. VI, 1970, 表富士(Ko): 4. VII, 1974, 滝沢林道(T)
31. *Pidonia amentata* セスジヒメハナカミキリ
14. VI, 1970, 表富士(S): 5. VI, 1971, 浅間神社(Ki)
32. *Pidonia oyamae* オヤマヒメハナカミキリ

22. VII. 1952, 表富士(平野幸彦): 25. VII. 1970, 表富士(Ko): 21. VII. 1974, 滝沢林道(S): 18. VII. 1974, 小富士(S)

富士山が原産地だが個体数は少なく、1700m以上の高い所に分布している。

33. *Pidonia puziloi* フタオビノミハナカミキリ

28. VI. 1970, 表富士(Ko, Ki, T): 3. VII. 1974, 青木ケ原(T)

34. *Pidonia debilis* チャイロヒメハナカミキリ

17. VII. 1969, 須走(Ki): 28. VI. 1970, 表富士(Ko, T)

35. *Ohbayashia nigromarginata* ヘリグロホソハナカミキリ

28. VI. 1970, 表富士(Ko) 1 ex

36. *Nivellia maculata* ムナミゾハナカミキリ

10. VII. 1974, 富士林道(Ko) 1♂

花のよく咲いているオンタデ?の葉上で得られた。分布的には画期的な記録で、今までは南アルプスの樺島が東限であった。

37. *Judolia cometes* マルガタハナカミキリ

17. VII. 1969, 富士宮口2合目(Ki)

38. *Anoplodera misella* チャボハナカミキリ

28. VI. 1970, 表富士(Ko)

39. *Anoplodera excavata monticola* クロルリハナカミキリ

13. VII. 1974, 青木ケ原(S): 10. VII. 1974, 富士林道(Ko)

40. *Anoplodera cyanea* ルリハナカミキリ

25. VII. 1970, 表富士(Ko): 18. VII. 1974, 小富士(Ki)

41. *Anoplodera azumensis* ミヤマルリハナカミキリ

11. VI. 1972, 青木ケ原(Ki)

42. *Anoplodera pyrrha* ヒメアカハナカミキリ

25. VII. 1970, 表富士(Ko)

43. *Anoplodera scotodes* ツヤケシハナカミキリ

18. VI. 1967, 西湖付近(高桑): 17. VII. 1969, 富士宮口2合目(Ki): 21. VII. 1974, 滝沢林道(S)

44. *Anoplodera rubra succedanea* アカハナカミキリ

10. VII. 1969, 御殿場口2合目(Ki): 3~4. VII. 1974, 青木ケ原(Ki, S, T)

45. *Anoplodera igai* イガブチヒゲハナカミキリ

3~4. VII. 1974, 青木ケ原(Ki, S, T): 10. VII. 1974, 富士林道(Ko): 18. VII. 1974, 富士林道(Ki, T)

非常に局地的な分布をしているようで、青木ケ原周辺ではかなり得られるが、その他の場所では表富士で1頭得られているのみである。

46. *Leptura aethiops* クロハナカミキリ

4. VII. 1971, 表富士(T): 11. VII. 1971, 表富士(Ki): 10. VII. 1974, 富士林道(Ko): 18. VII. 1974, 小富士(Ki)

47. *Leptura arcuata mimica* ヤツボシハナカミキリ

18. VI. 1967, 西湖付近(高桑): 17. VII. 1969, 富士宮口2合目(Ki): 2. IX. 1973, 吉田口2合目(Ki)

18. VIII. 1974, 小富士(T)
48. *Leptura ochraceofasciata* ヨツスジハナカミキリ
18. VI. 1967, 西湖付近(高桑): 17. VIII. 1969, 吉田口2合目(Ki): 3~4. VIII. 1974, 青木ケ原(Ki, S, T)
49. *Leptura kusamai* ヒメヨツスジハナカミキリ
- 3~4. VII. 1974, 青木ケ原(Ki, S, T): 10. VIII. 1974, 富士林道(Ko)
50. *Leptura subtilis* ヤマトヨツスジハナカミキリ
25. VII. 1970, 表富士(Ko): 4. VIII. 1974, 青木ケ原(Ki, S): 18. VIII. 1974, 富士林道(Ki)
51. *Leptura regalis* オオヨツスジハナカミキリ
- 3~4. VII. 1974, 青木ケ原(Ki, S, T): 10. VIII. 1974, 富士林道(Ko)
52. *Leptura thoracica* セアカハナカミキリ
10. VIII. 1974, 富士林道(Ko) 目撃
53. *Leptura vicaria* フタスジハナカミキリ
18. VI. 1967, 西湖付近(高桑): 17. VIII. 1969, 富士宮口2合目(Ki): 3~4. VIII. 1974, 青木ケ原(Ki, S, T)
54. *Leptura femoralis* カタキハナカミキリ
21. VIII. 1974, 青木ケ原(岩波力): 20. VIII. 1974, スバルライン2~3合目(蓮尾篤)
55. *Japonostrangalia dentatipennis* ヒゲジロハナカミキリ
25. VII. 1970, 表富士(Ko): 2. VIII. 1970, 表富士(Ki): 3~4. VIII. 1974, 青木ケ原(Ki, S, T)
56. *Strangalomorpha tenuis* アオバホソハナカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ki): 11. VII. 1970, 表富士(T)
57. *Parastrangalis nympha* ニンフホソハナカミキリ
2. VIII. 1970, 表富士(Ki): 3~4. VIII. 1974, 青木ケ原(Ki, S, T)
58. *Parastrangalis lesnei* ニョウホウホソハナカミキリ
2. VIII. 1970, 表富士(Ki): 3~4. VIII. 1974, 青木ケ原(Ki, S, T)
59. *Parastrangalis shikokensis* タテジマホソハナカミキリ
25. VII. 1970, 表富士(Ko): 4. VIII. 1974, 青木ケ原(S, T)
60. *Strangalia koyaensis* コウヤホソハナカミキリ
- 3~4. VIII. 1974, 青木ケ原(Ki, S, T)
- この種も局地的に分布し、青木ケ原付近のみに多産する。
61. *Strangalia takeuchii* タケウチホソハナカミキリ
25. VII. 1970, 表富士(Ko) 1♂: 3. VIII. 1974, 青木ケ原(T) 2♀♀: 4. VIII. 1974, 青木ケ原(Ki) 1♂
- 本州では東限の記録であろう。
62. *Strangalia dulcis* ジャコウホソハナカミキリ
18. VI. 1967, 西湖付近(高桑): 3~4. VIII. 1974, 青木ケ原(Ki, T): 10. VIII. 1974, 富士林道(Ko)
63. *Strangalia contracta* ミヤマホソハナカミキリ
- 3~4. VIII. 1974, 青木ケ原(Ki, S, T)
64. *Strangalia hakonensis* ハコネホソハナカミキリ

- 3~4. VII. 1974, 青木ケ原(Ki, S, T): 10. VII. 1974, 富士林道(Ko)
65. *Strangalia hosohana* ホソハナカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ko, Ki): 3~4. VII. 1974, 青木ケ原(S)
66. *Corennys sericata* キヌツヤハナカミキリ
25. VII. 1970, 表富士(Ko): 3~4. VII. 1974, 青木ケ原(Ki, S, T)
67. *Necydalis harmandi* クロホソコバネカミキリ
2. VII. 1972, 表富士(Ko): 26. VII. 1972, スパルライン(S): 2. IX. 1973, 滝沢林道(衣笠恵士): 28. VII. 1974, 滝沢林道(岩波)
68. *Necydalis solida* オオホソコバネカミキリ
2. VII. 1970, 表富士(Ki) 1♀
69. *Stenygrynus quadrinotatus* ヨツボシカミキリ
15. VI. 1971, 御殿場萩原(S, Komatsu)
70. *Molorchus kojimai* コジマヒゲナガコバネカミキリ
11. VI. 1972, 青木ケ原(Ki): 16. VI. 1974, 青木ケ原(Ki)
71. *Rosalia batesi* ルリボシカミキリ
17. VII. 1969, 表富士(Ko)
72. *Chelidonium quadricolle* アオカミキリ
4. VII. 1974, 青木ケ原(S) 1♂
73. *Chloridolum viride* ミドリカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ko)
74. *Palaeocallidium rufipenne* ヒメスギカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ko)
75. *Phymatodes testaceus* チャイロホソヒラタカミキリ
23. VI. 1971, 御殿場萩原(S, Komatsu): 10. VI. 1972, 浅間神社(Ki): 26. VI. 1974, 滝沢林道(S)
76. *Phymatodes albicinctus* シロオビチビヒラタカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ko)
77. *Phymatodes maaki* アカネカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ko, Ki)
78. *Xylotrechus chinensis* トラフカミキリ
16. VII. 1974, 山中村(S)
79. *Xylotrechus clarinus* ツマキトラカミキリ
25. VII. 1970, 表富士(Ko)
80. *Xylotrechus cuneipennis* ウスイロトラカミキリ
25. VII. 1970, 表富士(Ko)
81. *Xylotrechus grayii* ムネマダトラカミキリ
21. VII. 1974, 青木ケ原(岩波)
- かなり面白い記録である。
82. *Xylotrechus zebratus* キジマトラカミキリ

20. VII. 1974, スバルライン 2~3 合目(蓮尾)

花上で得られたが、これも注目すべき記録であろう。

83. *Clytus auripilis* キンクトラカミキリ

14. VI. 1970, 表富士(S)

84. *Clytus melaeus* シラクトラカミキリ

28. VI. 1970, 表富士(Ko): 21. VII. 1974, 青木ヶ原(S)

85. *Cyrtoclytus caproides* キスジトラカミキリ

25. VII. 1970, 表富士(Ko): 2. VIII. 1970, 表富士(Ki)

86. *Brachyclytus singularis* アカネトラカミキリ

14. VI. 1970, 表富士(S): 28. VI. 1970, 表富士(Ko)

87. *Chlorophorus diadema kurotora* クロトラカミキリ

16. VII. 1974, 山中村(S): 28. VIII. 1974, 新吉田貯木場(S): 18. VIII. 1974, 小富士(T)

88. *Chlorophorus japonicus* エグリトラカミキリ

18. VI. 1967, 西湖付近(高桑): 2. IX. 1973, 吉田口 2 合目(Ki)

89. *Rhaphuma xenisca* ホソトラカミキリ

21. VII. 1974, 青木ヶ原(S)

90. *Rhaphuma diminuta* ヒメクロトラカミキリ

28. VI. 1970, 表富士(Ko)

91. *De monax transilis* トゲヒゲトラカミキリ

28. VI. 1970, 表富士(Ko): 11. VI. 1972, 青木ヶ原(Ki)

92. *Paraclytus excultus* シロトラカミキリ

28. VI. 1970, 表富士(Ko, Ki): 21. VII. 1974, 新吉田貯木場(S)

93. *Anaglyptus matsushitai* マツシタトラカミキリ

18. VI. 1967, 西湖付近(高桑)

94. *Anaglyptus bellus* アカジマトラカミキリ

10. IX. 1967, 山中湖

95. *Purpuricenus spectabilis* ヘリグロベニカミキリ

2. VII. 1972, 表富士(Ko)

96. *Falsomesosella gracilior* シロオビゴマフカミキリ

28. VI. 1970, 表富士(Ko)

97. *Mesosa japonica* ゴマフカミキリ

18. VI. 1967, 西湖付近(高桑)

98. *Mesosa senilis* ウスアオゴマフカミキリ

28. VI. 1970, 表富士(Ko)

99. *Mesosa longipennis* ナガゴマフカミキリ

25. VII. 1970, 表富士(Ko)

100. *Asaperda agapanthina* シナノクロフカミキリ

17. VIII. 1969, 表富士(Ki)

101. *Asaperda rufipes* キクスイモドキカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ko) : 27. VI. 1971, 青木ヶ原(T)
102. *Microlera ptinoides* ヒシカミキリ
18. VI. 1967, 西湖付近(高桑) : 10. VI. 1972, 富士吉田(Ki)
103. *Cleptometopus himaculatus* ハスオビヒゲナガカミキリ
6. VII. 1974, 表富士(S)
104. *Pseudocala mobius japonicus* ドウボソカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ko, Ki, S) : 2. VIII. 1970, 表富士(Ki)
105. *Pterolophia japonica* シロオビサビカミキリ
17. VII. 1969, 表富士(Ki)
106. *Pterolophia zonata* アトジロサビカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ko)
107. *Pterolophia caudata* トガリシロオビサビカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ko)
108. *Pterolophia granulatus* アトモンサビカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ko) : 10. VI. 1972, 浅間神社(Ki)
109. *Pterolophia jugosa* ナカジロサビカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ko, Ki)
110. *Mesosella simiola* クワサビカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ko, Ki)
111. *Egesina bifasciana* ニイジマチビカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ko)
112. *Mesochthistatus fujisanus* フジコブヤハズカミキリ
11. VII. 1971, 表富士(Ki, T) : 16. VII. 1971, 表富士(T)
表富士には多いが北富士側では稀。
113. *Parechthistatus grossus* セダコブヤハズカミキリ
4. VII. 1971, 表富士(Ki, T) : 11. VII. 1971, 表富士(T) : 2. VII. 1972, 表富士(Ko)
1971年7月16日に筆者が採集したコブヤハズの1個体は、体形がフジコブヤハズとセダコブヤハズのちょうど中間のような形をしており、どちらの種とも同定しかねるものであった。万が一 hybrid だとすると属間雑種どころか族間雑種ということになり、いろいろな意味で興味深いものである。
114. *Monochamus grandis* ヒゲナガカミキリ
2. IX. 1973, 新吉田野木場(Ki) : 10. VIII. 1974, 紅葉台(Ko)
115. *Monochamus nitens* シラフヒゲナガカミキリ
2. VIII. 1969, 表富士(Ki) : 18. VIII. 1974, 須走口新5合目(S)
116. *Monochamus alternatus* マツノトビイロカミキリ
10. VIII. 1974, 紅葉台(Ko)
117. *Monochamus subfasciatus* ヒメヒゲナガカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ko)

118. *Anoplophora malasiaca* ゴマダラカミキリ
10. VIII. 1969, 籠坂峠 (Ki)
119. *Acololepta fraudatorix* ビロウドカミキリ
25. VIII. 1970, 表富士 (Ko) : 2. IX. 1973, 新吉田貯木場 (Ki) : 3. VIII. 1974, 山中湖 (T)
120. *Acololepta sejuncta* ニセビロウドカミキリ
4. VIII. 1974, 青木ヶ原 (Ki)
121. *Uraecha bimaculata* ヤハズカミキリ
25. VIII. 1970, 表富士 (Ko) : 28. VII. 1974, 吉田口 (S)
122. *Xenicotela pardalina* チャボヒゲナガカミキリ
16. VI. 1974, 青木ヶ原 (Ki)
123. *Palimna liturata* ヒゲナガゴマフカミキリ
2. VIII. 1970, 表富士 (Ki) : 10. VIII. 1974, 富士林道 (Ko) : 18. VIII. 1974, 富士林道 (Ki)
124. *Rhodopina lewisii* セミスジコブヒゲカミキリ
26. VIII. 1970, 表富士 (S)
125. *Rhodopina integripennis* マルバネコブヒゲカミキリ
26. VIII. 1970, 表富士 (S)
126. *Rhopaloscelis maculatus* フタモンアラゲカミキリ
28. VI. 1970, 表富士 (Ko) : 27. IX. 1970, 表富士 (T) : 3. VIII. 1974, 青木ヶ原 (T)
127. *Rhopaloscelis bifasciatus* フタオビアラゲカミキリ
28. VI. 1970, 表富士 (Ko) : 2. VIII. 1970, 表富士 (Ki)
128. *Rhopaloscelis unifasciatus* ヒトオビアラゲカミキリ
28. VI. 1970, 表富士 (Ko)
129. *Miccolamia cleroides* カッコウカミキリ
28. VI. 1970, 表富士 (Ko, T) : 27. IX. 1970, 表富士 (Ki, T)
130. *Miccolamia verrucosa* チビコブカミキリ
27. IX. 1970, 表富士 (T) : 11. VII. 1971, 表富士 (Ki)
131. *Graphidessa venata* クモノスモンサビカミキリ
28. VI. 1970, 表富士 (Ko) : 2. VIII. 1970, 表富士 (Ki)
132. *Cylindilla grisescens* ハイイロツツクビカミキリ
27. VI. 1971, 青木ヶ原 (T)
133. *Doius adachii* シロオビドイカミキリ
10. VIII. 1974, 富士林道 (Ko)
134. *Eupogonopsis tenuicornis* ホソヒゲケブカカミキリ
28. VI. 1970, 表富士 (Ko) : 27. IX. 1970, 表富士 (Ki)
135. *Sybrodiboma subfasciata* シロオビチビカミキリ
17. VIII. 1969, 表富士 (Ki) : 2. VIII. 1970, 表富士 (Ki) : 3. VIII. 1974, 青木ヶ原 (T)
136. *Callapoecus guttatus* ゴイシモモブトカミキリ
27. IX. 1970, 表富士 (Ki, T) : 3~4. VIII. 1974, 青木ヶ原 (Ki, S, T)

137. *Acanthocinus griseus* スジマダラモモブトカミキリ
2. Ⅸ. 1973, 新吉田貯木場(Ki) : 4. Ⅷ. 1974, 滝沢林道(T)
138. *Leiopus stillatus* ゴマダラモモブトカミキリ
3. Ⅷ. 1974, 青木ケ原(T) : 10. Ⅷ. 1974, 富士林道(Ko)
139. *Erysamena saperdina* トゲバカミキリ
17. Ⅷ. 1969, 表富士(Ki) : 28. Ⅵ. 1970, 表富士(Ko) : 3. Ⅷ. 1974, 青木ケ原(S)
140. *Exocentrus galloisi* ガロアケンカミキリ
3. Ⅷ. 1974, 青木ケ原(Ki)
141. *Exocentrus testudineus* キッコウモンケンシカミキリ
2. Ⅷ. 1970, 表富士(Ki)
142. *Exocentrus lineatus* アトモンマルケンシカミキリ
28. Ⅵ. 1970, 表富士(Ko)
143. *Exocentrus fasciolatus* クモガタケンシカミキリ
28. Ⅵ. 1970, 表富士(Ko)
144. *Miacnia tonsa* ケンシカミキリ
14. Ⅵ. 1970, 表富士(S)
145. *Saperda octomaculata* ヤツボシカミキリ
28. Ⅶ. 1974, 滝沢林道(S)
注目すべき記録である。
146. *Saperda interrupta* ヘリグロアオカミキリ
2. Ⅷ. 1970, 表富士(Ki) : 23. Ⅶ. 1974, 滝沢林道(S)
147. *Eutetrarcha sedecimpunctata* シナカミキリ
28. Ⅵ. 1970, 表富士(Ko, Ki, T) : 11. Ⅶ. 1971, 表富士(Ki)
148. *Eutetrarcha ocelota* ヤツメカミキリ
28. Ⅵ. 1970, 表富士(Ko)
149. *Eutetrarcha chrysochloris* ハンノアオカミキリ
28. Ⅵ. 1970, 表富士(Ko) : 2. Ⅸ. 1973, 滝沢林道(Ki)
150. *Pareutetrarcha simulans* ニセシラホシカミキリ
6. Ⅶ. 1969, 籠坂峠(中臣謙太郎)
151. *Menesia sulphurata* キモンカミキリ
3. Ⅷ. 1974, 大室山(T)
152. *Cagosima sanguinolenta* ハンノキカミキリ
28. Ⅶ. 1974, 滝沢林道(S) : 18. Ⅷ. 1974, 須走口新5合目(T)
153. *Glenea relictata* シラホシカミキリ
18. Ⅵ. 1967, 西湖付近(高桑) : 2. Ⅷ. 1970, 表富士(Ki)
154. *Eumecocera unicolor* クロニセリンゴカミキリ
28. Ⅵ. 1970, 表富士(Ko, T) : 4. Ⅶ. 1971, 表富士(Ki) : 11. Ⅶ. 1971, 表富士(T)
155. *Eumecocera trivittata* セミスジニセリンゴカミキリ

2. VII. 1972, 表富士(Ko)
156. *Niponostenostola niponensis* カツラカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ko, Ki, T); 4. VII. 1971, 表富士(Ki, T); 11. VII. 1971, 表富士(T)
157. *Nupserha marginella* ヘリグロリンゴカミキリ
2. VII. 1972, 表富士(Ko)
158. *Oberea hebesceus* フチグロチャバネリンゴカミキリ
28. VI. 1970, 表富士(Ki); 2. VII. 1970, 表富士(Ki)
159. *Oberea inclusa* ホソキリンゴカミキリ
6. VII. 1969, 籠坂峠(中臣)

以上のリストは小宮次郎、木村欣二、須賀邦耀の3氏と筆者の4人の記録をもとにして、それに若干の方々の記録を加えて作成した。また、標本が現存しているものを原則としたため、かなり抜けている種類もあり、同行した採集者名も落ちていることをお断りしておく。

■ 文献による記録

上記リスト以外の記録としては、次のものがある。これはいずれも「富士山総合学術調査報告書」(1971年・富士急行株式会社発行)によるものである。

1. *Pidonia japonica* ニッポンヒメハナカミキリ
2. *Pidonia testacea* ニセフタオビノミハナカミキリ
3. *Necydalis formosana nimurai* トガリバホソコバネカミキリ

1) ニッポンヒメハナカミキリについて

おそらく同定間違いであろう。推察すれば、産地が青木ヶ原上限ということ、われわれの今までの調査では富士山北側ではホソガタヒメハナは採集されていないこと、青木ヶ原周辺では *Pidonia* のうちいちばん多く採集できるヘリモンヒメハナが調査リストに入っていない等の点から、この標本はおそらくヘリモンヒメハナの前胸が黒化したシコクヒメハナ型のものではないであろうか。

2) ニセフタオビノミハナカミキリについて

われわれの調査では標高2000m付近で採集した個体まですべてフタオビノミハナであった。今後、さらに調査の必要な種類である。

3) トガリバホソコバネカミキリについて

この調査報告では採集地点や採集日がハッキリしていない。少ないながらタンナサワフタギもあり、ヘリグロホソハナも採集されていることから考えると、表富士側で今後発見される可能性は大きい。

■ 富士山では記録がなく、周辺山地(三ツ峠、愛鷹山、箱根)で採集されている種類

1. *Prionus sejunctus* ニセノコギリカミキリ
箱根
2. *Enoploderes bicolor* ヒラヤマコブハナカミキリ

越前岳頂上付近、24. V. 1963, 梅沢賢造(駿河の昆虫 №46—1964年6月による)

3. *Gaurotes aureopurpurea* クビアカハナカミキリ 22
1. VII. 1973, 三ツ峠(長尾悟)
4. *Gaurotes otome* オトメクビアカハナカミキリ 23
1. VII. 1973, 三ツ峠(長尾悟)
5. *Le mura japonica* ニセハムシハナカミキリ 24
1. VII. 1973, 三ツ峠(長尾): 30. VI. 1974, 三ツ峠(露木, 木村)
6. *Pidonia miwai* ミワヒメハナカミキリ 25
30. VI. 1974, 三ツ峠(木村)
7. *Pyrrhona laeticolor* ヘリウスハナカミキリ 26
- 箱根, 愛鷹山
8. *Judolidia bangi* スバタマハナカミキリ 27
- 三ツ峠, 箱根
9. *Paranaspia anaspidoides* ペニバハナカミキリ 28
- 箱根
10. *Necydalis formosana niimurai* トガリバホソコバネカミキリ 29
- 箱根, 愛鷹山
11. *Massicus raddei* ミヤマカミキリ 30
- 箱根
12. *Allotraeus sphaerioninus* トビイロカミキリ 31
- 箱根
13. *Se manotus japonicus* スギカミキリ 32
- 箱根
14. *Xylotrechus emaciatu* ニイジマトラカミキリ 33
- 箱根
15. *Epiclytus yokoyamai* ヨコヤマトラカミキリ 34
- 三ツ峠, 箱根
16. *Chlorophorus notabilis* キイロトラカミキリ 35
- 箱根
17. *Anaglyptus niponensis* トガリバアカネトラカミキリ 36
- 箱根
18. *Anaglyptus subfasciatus* スギノアカネトラカミキリ 37
- 箱根
19. *Dere thoracica* ホタルカミキリ 38
- 箱根
20. *Purpuricenus te mminckii* ペニカミキリ 39
- 箱根
21. *Xylariopsis mimica* クビジロカミキリ 40

箱根(小田原競技場付近) 18. V. 1974 (田中康彦)

22. *Aulaconotus pachypezoi* タテジマカミキリ
箱根
23. *Niphona furcata* ハイイロヤハズカミキリ
箱根
24. *Acalolepta luxuriosa* センノキカミキリ
箱根
25. *Acalolepta degener* ヒメビロウドカミキリ
箱根(仙石原)
26. *Parautetrapha eximia* フチグロヤツボシカミキリ
箱根
27. *Paramenesia kasugensis* カスガキモンカミキリ
箱根
28. *Thyestilla gebleri* アサカミキリ
箱根
29. *Paraglenea fortunei* ラミーカミキリ
箱根
30. *Eumecocera argyrosticta* ヒゲナガシラホシカミキリ
愛鷹山
31. *Phytoecia rufiventris* キクスイカミキリ
箱根
32. *Epiglenea comes* ヨツキボシカミキリ
箱根
33. *Oberea japonica* リンゴカミキリ
箱根
34. *Oberea nigriventris* ホソリンゴカミキリ
箱根

(箱根の記録は、小田原に近い所など低地の記録は除いてある。なおクビジロカミキリは低い所で採集されたが、例外として入れておいた。)

富士山周辺部山地で採集されている種類をみると、ほとんどのものが富士山の調査不足のため、富士山での記録がない種類とみることができそうで、特に愛鷹山、箱根のものはごく特殊な種類を除くと、当然富士山にいたると思われるものばかりである。

これは樹相その他から見れば当然のことかもしれない。特に表富士側とは共通性が高いこともうなずける。

しかしながら北富士と三ツ峠は距離的にはごく近くにありながら、少々様相が違いうようだ。まず富士山では採集できそうもない種類として、ミワヒメハナ、ニセハムシハナが挙げられる。どちらも大菩薩山塊には産し、他の甲虫からみても、三ツ峠は富士山より大菩薩系に属するように思われる。

箱根に産するもののうち、一風変わっているのは、アサカミキリとラミーカミキリであろう。アサカミキリは仙石原湿原のアザミに在るが、富士山ではフジアザミが多くあり、まだほとんど調査されていない朝霧高原方面で見出される可能性がある。ラミーカミキリは小田原周辺でムクゲやカラムシに多いが、仙石原のムクゲにまで飛来する。この種類が西から東へ分布を広げて来たであろうことは容易に想像されるが、高度およそ800 mで高度の割には寒冷的な仙石原に適応していることは驚異である。

ラミーカミキリは非常に特異な分布形態をしており、仙石原に分布するからといって、富士山で見出すのは非常に困難なように思われる。この2種類以外は、地理的条件、樹相、分布形態等から考えて、富士山に産する可能性が非常に高い。

なお横道にそれるが、小田原周辺の低地では *Ceresium* (ヒメカミキリ属) が数種ほか、キイロミヤマ、アメイロ、ホシベニ、キボシ、イッシキモンキなど、海岸性・南方系種も記録されている。

■おわりに

富士山は標高差も充分、樹相もすばらしく、われわれのごく短い期間の調査でも、少なくともカミキリに関しては、少々オーバーな表現をすれば宝庫といってさしつかえない感じである。

短期の調査のため多分に主観的な面もあるかと思うが、単に珍しい種類が採集されるとか、種類が豊富だとかいう採集地としての良さだけでなく、表富士側と北富士側との種類の差があるように感じられること、局地的に分布する種類の多いこと、周辺地域との関連、ひょっとしたら分布しているかもしれないと思っている種類が実際に採集される意外性など、今後の研究対象としていろいろなテーマを与えてくれるという意味で、非常に興味深い地域だと感じている。

今後、ぜひ多くの方が富士山を調査され、どしどし研究発表して下さるようお願いすると同時に、この小文がそのはずみ車になれば、幸いである。

〒 213 逗子市逗子7-1-24

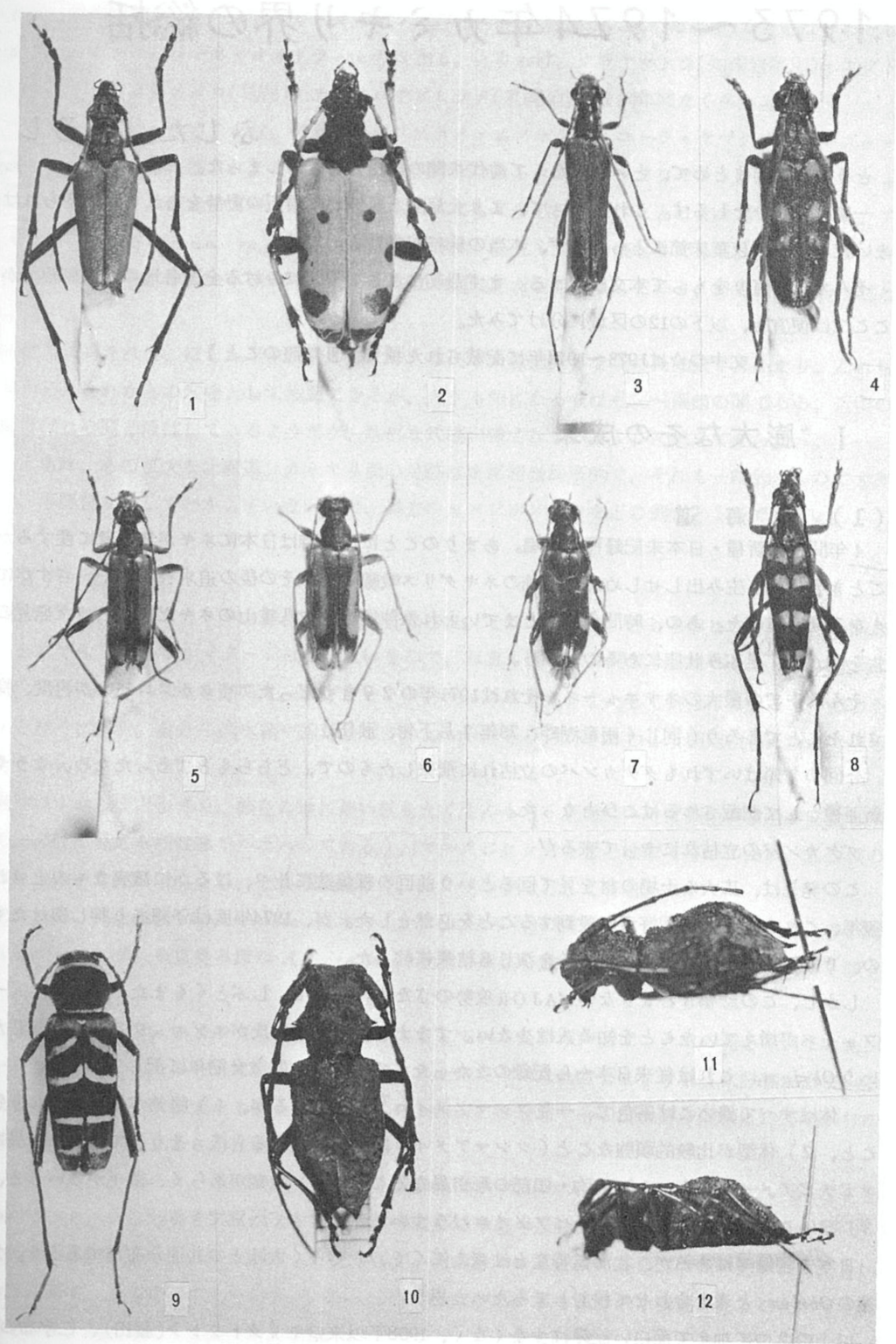
Plate: 富士山のカミキリ (P. 15)

1. キベリカタビロハナカミキリ 2. フタスジカタビロハナカミキリ
3. ヘリグロホソハナカミキリ 4. ムナミゾハナカミキリ 5. ヘリ
- モンヒメハナカミキリ 6. フジヒメハナカミキリ(♂) 7. 同(♀)
8. ヒメヨツスジハナカミキリ 9. キジマトラカミキリ 10. セダカ
- コブヤハズカミキリとフジコブヤハズカミキリの Hybrid と思われる個
- 体 11. 同斜上部面 12. 同側面

。アサカ
査されて
ラムシに
ことは容
異である。
ヒ山で見
から考え
ロミヤ
。

もカミ
種類が
て感じ
へるか
なテー

：同時



1973～1974年カミキリ界の総括

ふじた ひろし

とうとう2年まとめて、といういたって前代未聞の総括となってしまった。しかし……

一度に2年分をしるす。これによって、より大局的な見地から最近の動静をあれこれ考えられはしないだろうか。枝葉末節にとらわれず、本当の総括が書けるのでは。

そんな開き直りをもって本文は始まる。まず最初はここ2年間における全国各地の成果御紹介から。ここでは便宜上、以下の12の区域に分けてみた。

(文中の☆は1973～1974年に記載された種で、Ⅲ参照のこと)

I 膨大なその成果

(1) 北海道

4年間連続新種・日本未記録種が登場。あまりのことに、一時は日本にネキが無尽蔵に産するかのとき妄想すら生み出しせしめた“恐怖のネキダリス戦線”も、その後の追求むなしく、さすがに衰えをみせはじめた。あの、時間の問題とまでいわれた沖縄本島や八重山のネキだに、いまだ発見の報告を聞かず、^{※①}足ぶみ状態にあるのだから。

そんな中での最大のネキニュース。それは1971年の2♀きりだったアイヌホソコバネが再度、採集されたことであろう(同じく雨竜湖畔, 73年7月下旬, 藤田)

今回の2頭はいずれもダケカンバの立枯れに飛来したもので、どちらも♂であったため、ようやく新亜種として記載されるはこびとなった。

ダケカンバの立枯れにやって来る!!

この発見は、広大な土場の材を見て回るという前回の採集法に比べ、はるかに確実なものとされ、翌年、これをたよりに同好者が殺到することを必然とした。が、1974年度は予想通り押し寄せたものの、0敗に終る……という体たらくを演じる結果に終わった。

しかし、この悲惨きわまりないMAJOR攻勢のさなかにあって、しぶとくもまた、日本のニュー・フェイスが増えていたことを知る人は少ない。すなわち、深町宗通氏がエゾニュウの花で採集したという *Obrium*。これは従来日本から記録のなかったものである。特徴を簡単に記しておくと、
— 体はすべて濃いこげ茶色で、一見ツシマアメイロ[☆]に極似するが、1) 腿節が棍棒状でより短いこと、2) 体型が比較的頑強なこと(ツシマアメイロはこれに比べるとほっそりしている)で異なり、サドチビアメイロとも、1) 前胸・頭部の形が異なること、2) 点刻があらく、微毛が多いこと、3) 濃いこげ茶色の体色(サドチビアメイロはうすい黄色)ですぐ区別できる。

日本未記録ではあるが、北海道特産とは考えにくく、おそらく大陸との共通分布種であろう。大陸産の *Obrium* と考え合わせて検討してみたいと思う。

以上の2つに加えて面白い記録は少なくなく、1958年以来のキョクトウトラ(藤田)、仁宇布のホソ^{※①}石垣島オモト岳でそれらしきものを目撃したという話、また実際に採れたという噂もある。

トドマツ(深町)、道内初記録のベニバハナ※②(雨竜湖、伊藤淳)、陸別のチャバネクロツツとヨコグロケシ、道内数頭めのヒトオビチビ・オニホソコバネ(共に札幌周辺、五十幡直樹)などをはじめとし、ヒゲブトハナ・ホソコバネ・オオトラ etc の大物も。とりわけ、クワヤマトラ(知床岩尾別)・エゾトラ(札幌)・ナカネアメイロ(札幌)・チャイロチビヒラタ(札幌他)等は例年に多く多かった。

これからに期待したいことは、例えばミドリヒラタ・ムツボシアオコトラ・ヤマナラシモモブト・キボシマダラといった顔ぶれ。これらが、ここ数年来のエトロフハナ・クワヤマトラ・ムネモンチャイロトラのごとく、産地やピークを見つけることによって多数採れだすことは充分考えられるし、アイヌホソコバネや *Obrium* sp. に続く大陸系のカミキリ発見も大きな楽しみである。カラフトホソコバネにしても現在、樺太〜本州の中間にあたる北海道はまだ空白となっており、分布はむしろ当然とさえいえる。

地域別で考えれば、ほとんど未調査の道北や、はたまた無気味さを秘めた知床半島あたり。これらはもちろんこれからの穴場として推薦できるが、どうも気になるのは札幌〜函館の間である。近頃の採集者はこの間を飛ばしているようだが、意外な穴場が残されているように思えてならない。

ともあれ、あの広大な北海道。カミキリ屋の足跡はまだ相当局所的で、それも一時的なものにすぎなく、平野部からしてわかっていないのは、過去のヨスジホソハナなどの例をとるまでもない。

(2) 本 州

1972年の秋、日本のカミキリ界に新顔属が登場した。それも本州で。ところがこの *Atimia*、新顔といわれても、なかなかイメージはわからないもので、写真も図も未公開であったことからか、安易に「ケブカマルクビ」の和名を聞いて、ケブカヒラタとマルクビヒラタをたして割ったようなものだろう……と勝手に解釈。自分の標本箱や四角紙の中の *Asemini* をひっかきまわして総点検したあわて者もいたとかいう。

実物は1 cm以下と小さく、銀色の地に黒い紋をたくさんもち(正確に言えば銀色の微毛が密生していて、黒紋に見える所は微毛がないのである)、マルクビヒラタなどとは似ても似つかぬ。この属のものは北米を分布の中心とし、その種類は多く、ヒノキの害虫として有名。

記載以降、岡山の *A. okaya mensis* はネズミサシ(ヒノキ科)の衰弱木に集まることが判り、多数得られるに至ったが、東京奥多摩の *A. fujimurai* は誰も採集を試みていないためか、タイプの1頭きり。

そして1974年6月、いまや有名採集地の1つとなっている長野県戸台でコナシの花を叩いていた川田一之氏はとんでもないことに *Atimia* を採ってきたのだ!! これは E L Y T R A に詳細が出ているので省略するが、これもまた1頭のまま。日本の *Atimia* の分布やその関係等の問題は1975年からの課題として据えおかれることになったのである。

トウホクトラカミキリ、原記載以来まったく記録を聞かず、「ホソトラの異常型ではないか」などと言われていた、いわば幻のトラ。その2頭目が青森県は津軽半島の先端部(小泊)で採集された。※③

採集者の阿部東氏はトウホクトラとは気づかず、他のカミキリと共に高桑氏の元へ送られた、というのが内幕で、小包を開けた高桑氏を「ギャッ!」と叫ばせた。私もようやく現物を見ることができた※②その後、利尻島でも採集されたと聞く。

※③阿部東・高桑正敏(1974): トウホクトラ ⑧の採集例、甲虫ニュース Nos. 23/24

が、なるほどホソトラなどとはまるで異なり、上翅は比較的短いに対し、後足はヨコヤマトラのごとく長く、上翅の模様はエゾトラ調となかなか素晴らしい。

生態図鑑の写真はなにかカビでもまとわりついているように見えてさえないが、これなら来年から北海道行き帰りのカミキリ屋を、さぞたくさん呼び寄せるであろう。

福井県でオガサワラチャイロ!!※④はこれまたおそろべき記録である。典型的な南方系天牛(いわゆる第四分布帯要素)の本種が、なぜ福井県下にいるのかは理解に苦しむところ。こんなことがたびたびあるようだと、どこそこに何がいそう、などといった予想はやめたくもなる。本土でなく、雄島で、ということで一応海流によってなんとか説明はつけられるが……それにしても、まるで考えつかなかった分布には違いない。本土からほんのわずかに離れているだけでも、島というのはこれほどモロに海流の影響を受けるのだろうか。

こうしてみると、さんさん調べられているはずの本州ですらまだまだである。

有名採集地の概況については、ことさらに触れるつもりはなかったが、南アルプスは異例なまでにすばらしかった。

二軒小屋付近のやや古くなったカラマツ伐採木で、大珍品ミドリヒメスギが100頭近くも採れたことなど、あまりと言えばあまりのことで、本州の大珍品でさえ、インフレの圏外にいないというショックをもたらした1例である。カラフトホソコバネにしても毎年採れるようになり、1974年にはトウヒというホストも確認された。

秋には、近年著しく普及した秋期コブヤハズ採集法により、タニグチコブヤハズも高嶺の花から一挙下落、けだし、この採集法をとりいれると、3月の琉球に始まって10月末までが、いわゆるシーズンとなってしまうわけで、実にしんどい時代ともなった。

(3) 四 国

鬼のような怪記録こそでなかったものの、好記録は割に続出した。

1961年における中村氏以来、追加のなかったコゲチャヒラタは、足摺岬・黒尊等各所で採れだし、加えてオガサワラチャイロまでも1頭得られた(足摺)。と、いうことは南四国においてクロモンキイロイエはもちろん、*Nortia* など南方系カミキリが産する可能性も大ということで、今後のさらなる調査が期待される。

オガサワラチャイロ以外の四国初記録種としては、分布が予想されていたトウキョウトラ(小田深山等)、当初、キュウシュウトゲバなどと誤認されていた *Eryssa mena* sp. (=実はシマトゲバ(松山周辺、少なくない)、キイロメダカ(室戸岬)などがあげられる。従来極珍とされていたトゲウスバも松山市杉立においては比較的にコンスタントに採れるようになったし、クロサワヒメコバネも剣山・黒尊等でポツポツと採れだした。

高知側では工石山(奥工石)・大座礼山などの新産地が開発され、大きな成果があがっているが、前者におけるハイノキ立枯れでのトガリバホソコバネ・ヘリグロホソハナ多数発見、後者においてミヤマモモブト?(以前から剣山等で知られていたもので再検討の余地がある)が少なからず採れたのは興味深い。

Asaperda 属には何種か不明なものがある。

※④佐々治寛之(1974): オガサワラチャイロカミキリ福井県に産す、甲虫ニュース Nos. 21/22

(4) 九州

佐多岬における *Nortia* の発見

もっとも画期的なニュースはこれである。実物を見ていないのが残念だが、上翅は黄色っぽく、各足の腿節先端と脛節の基部が黒い、というものだそうである。10頭近く得られているようで、この他に三陰外茂治氏も宮崎県青井岳でこれと同様と思われるものを1頭、イタジイの樹皮下より採集している(8月上旬)。さらには、日南海岸の青島でも採れたという。ただし、これは足が全然黒くならな

いらしく、上記のものと同じものではないのかもしれない。

飛躍した分布がもう1つ。熊本県椎矢峠で採集されたキベリカタビロハナ(直海晶二郎氏)。南アから一躍に関西・中国・北九州を飛ばしての記録なのである。ちょっと考えにくいことから、キベリではなく大陸系の別物ではないかという意見まで出たくらいである。

その他は特にこれといったニュースはないが、九重のタンナサワフタギを夜間見回ることによって多数のマルバネゴブヒゲと共にヒトオビチビが割と得られたこと(清水文博氏)、従来極珍であったムネホシシロ?※⑤が佐賀県小城〜久保田のクリークにあるクワから、かなり多数羽化したこと(深町)があげられよう。

(5) 対馬および九州周辺の離島

足立一夫氏のけしかけにより、ようやく対馬北部が本格的に調査されだした。その中心となっているのは大星山。どんな所かという、例えばツシマアメイロ・ホソツヤヒゲナゴコバネ・ツシマゴフヤハズ・ツシマゴマフチビ・ツシマケシなど少なくとも、1日に2ケタは軽いというのがスネケブカヒロコバネ・キモンハナ・オオアオ・ムネモンヤツボシ・オオシロ・ムネホシシロ・キバネアラゲという面々である。

新種と思われるものでは、予想されていた *Pseudale*。頭部・前胸が大きく、一見ひょうたん型で特異な感じがする。圧巻なのはルリメダカカミキリ!? 一口でいえば、キイロメダカを大きくして、すこし上翅を長くしたようなものだが、色がかわっている。頭部は黒く、前胸はうすい黄色、そして上翅はルリカミキリのごとき“ルリ色”なのである(竹下富氏)。この *Stenhomalus* は大陸系のものと考えられるが、他にもこういったものはひそんでいるはずで、北部の調査はこれからがますます楽しみ。一般の若手九州勢も大星山ばかりでなく、もっと積極的に未開の他地域に臨んで欲しいものである。まだホソコバネの再発見という大物があるし、これは北部に限らないが、低山帯のタブ立枯れを夜間見回ることにより、オガサワラチャイロが採集できることと思う。

御本尊の足立氏はその後も1人厳原の海岸でクロマツを調べ、クリシマゴマフ(初記録)・キュウシュウトゲバ・ナカバヤシモモフトを羽化させたり、原記載以来のニセハイロハナを採集したり、自ら積極的に新天地を開発し、かつ実績をあげており、まさに若手カミキリ屋の範とするに足る。

下飯島では1973年8月、またも同地を訪れた宮原道則氏により、モウセンハナ・ムモンチャイロ・ホソバネ・タテジマ・クワが追加され、さらに不明種とされているアマクサゴマフを狙って天草島へも足をのばされたが、これは採れなかったという。

※⑤今まで日本において“ムネホシシロ”とされていたものは明らかに2種を含んでいる。近いうちに発表の予定。

(6)伊豆諸島

ここ最近の伊豆は御蔵島一色にみごと塗りつぶされ、驚異的な成果をみた。

まず1973年の6月下旬、久々のハネナシチビ採集の報が口火を切り(藤田)、7月、長尾悟・小坂隆氏が入島。同様にハネナシチビを得、1頭のみであったクロソンホソハナを6頭、さらにとても信じられないことに燈火に來たジュウニキボシまで採ってきた。そして8月には、「いない所でも採る男」と恐れられる中村俊彦氏が入島、コゲチャヒラタ系の *Eurypoda* sp. (*E. unicolor* と *E. boninensis* ☆の中間のようなもの)、ツマグロアメイロに似た *Pseudiphra* sp. を採集、ニックネームの本領発揮とともに、御蔵島もまた「いない虫でもいる島」の地位を不動のものとしたのであった。

あけて1974年。6月初旬よりハネナシチビやアラカワシロヘリトラ・トカラヤハズ・*Asaperda* sp. が多数得られた(藤田・小坂)ことを幕あけに、7~8月のベストシーズンには衣笠恵士・鈴木和利・下村徹・鈴木互・斉藤秀生・林良一氏といったカミキリ屋が続々と入り、たいへんな成果があった。

ハイライトは下村の *Penthides* sp. で、化物島のイメージは再び高められた。八重山のシロアラダ(仮称)にごく近いもので、1匹のみでは何ともいえないが、体が小さく、触角はやや長い。ハネナシチビもまた例外とはならず、ピーティング、および夜間薪の上を歩いているものの見回りを併行させることにより、計20頭以上採れるという事態にまで至った。その他は言うに及ばず……

御蔵にすっかり圧倒されてしまったが、八丈島では、クロコバネ・ベーツヒラタが採集され、また同島の枯木を持ち帰った山上明氏はアマミトビイロに似た *Allotraeus* sp. ・アラカワシロヘリトラを羽化させた。

怪物島・御蔵はこれからどんなものが採れるのであろうか。南方系のカミキリと山地性のカミキリの両極端が混生しているので、予側をゆるさない。八丈の *Allotraeus* やオガサワラチャイロなどは採集される可能性が高いし、*Nortia* がいてもおかしくない。想像力をかきたてるならば、ハナカミキリや *Molorchini*・*Obrini* の類いや *Chloridolum* sp. (ヤクシマミドリのようなカミキリを目撃したという話がある)とか考えられるし、*Necydalis* の発見も今の日本カミキリ界の現状からみれば無理からぬことではない。(?)また、石垣島オモト岳山頂に生息している小型の特殊な *Bumetopia* の系統が、御山山頂の湿原地帯ササ原にいたっているのでは。

(7)小笠原諸島

この地区は沖縄と共にアメリカの占領下にあったため、長い間日本のファウナからはずされて論じられてきたし、また大洋の小島で生物相の貧弱なこともあり、返還後も訪れた人は少ない。※⑥

カミキリは1972~1973年、父島の植物検疫所に赴任された楠井善久氏、および小島圭三博士らの調査、また若干の一般カミキリ屋により、ここ2~3年大幅な進歩をみ、整理された(1974、草間・奈良・楠井)。

ここでは一般カミキリ屋の成果を記そう。

1973年、ゴールドデンウィークに訪れた宮原・阿武氏がまず父島にて、ムネモンアメイロ☆・クロモンヒメ・オガサワラヒラタ・ツシマムナクボ(初)等10種あまりを採集。次いで5月下~6月上旬、

※⑥現在全島採集禁止となっており、許可がなくては採集不能。

3週間にわたる藤田の調査により、新属新種のヒゲシロアラゲ[☆]2♂をはじめ、原記載以来のオガサワラチャイロ・オガサワラゴマフ・オガサワラビロウドやムネモンアメイロ・オガサワラヒラタ・トサワトグスネキレバネ(舌をかみそうになるので、オガサワラモモブトコバネといった方がよい)・ケハラゴマフ・クロモンヒメ・ワモンサビ(初)等々20種近くがもたらされた。

10月には小林敏男・小田義広氏が入島。比較的多くのオガサワラビロウド・オガサワラゴマフや初記録のマツノマダラ(いくぶん黒化)、それに *Chlorophorus* が多数もちかえられ、これによって今まではっきりしなかったオガサワラトラ^{※⑦}の問題に解決をみた。すなわち、草間・奈良・楠井(1974)は1973年の秋に草稿されたので、少ない資料から2系統のトラを1つはオガサワラトラ、もう1つはその一型(*f. yayeyamaformis*)と扱っているが、この計百数十頭の個体を再検討するに及んで、後者は完全に別種であると決論された。つまり、小笠原にはオガサワラトラともう1種 *Chlorophorus* の新種を産するわけである。

翌、1974年6月下旬〜7月上旬には再び藤田が父・母両島へ。ヒゲシロアラゲの♀をはじめ、ひととおりを追加した。その際、帰りの船中で窓に止まっていた *Chlorophorus* は前2種ともさらに異なり、別種と思われる。ただし、発見時はちょうど鳥島沖を航行中であり、鳥島からやってきたのか、父島からついてきたのかは知るよしもない。もし、これが新種として記載されるならば、原産地は“父島丸”ということになってしまう(こんなラベルを書いたのは私としても初めて)。

それはともかく、現在小笠原の天牛は計25種、これに *Chlorophorus* の2新種と *Anoplophora* の不明種が加わって28種。コメツキは9種というが……琉球の島々とはあまりに差がある。

(8)熊毛諸島

もう全盛期はとうに越したはずの屋久島だったが、その人気はすごく、多くの天牛屋の集散地となった。

ことに1974年はすさまじいの一語につき、クロソンホソハナ・モウセンハナ・ヤクシマヨツスジハナ・ヤクシマミドリ・アラカワシロヘリトラ・コグチャヒラタといった^{・・・・・}の珍品はもはや多く採れて当たり前となり、これらは絶対落ちまい、と固く信じていた超珍品達もあれよあれよというまに、その2/3近くがことごとく没落、カミキリ界を驚かせた。その狂気のインフレーションを披露してみると……

まず、これまで2頭しか採れていなかったメタメソサ(コバネゴマフ)は6月、低地のクロマツで30頭近くも採れ(入江平吉氏による)、これまた雲上の天牛であったヤクシマコブヤハズも20頭近く、高塚小屋付近にて採集された(これも入江氏)。従来3頭のみで採集例しかなかった美しい墨色のヘリウスハナ屋久島亜種も6頭追加されるに及んで、ついに赤い型、および赤〜黒の中間の型がでた(しかし、赤とはいっても他産地のような赤でなく、むしろ茶色に近いものらしい)(むろん入江氏採集)タンナサワフタギの立枯れでは、付録として従来少なかったトガリバホソコバネも鬼のように採れ(入江氏)、さらには *Miccolamia* の新種と思われるものも30頭以上採れたという(いうまでもないが入江氏)。

ハイセイコー(注:入江氏のこと)と並ぶ屋久のオーソリティ、杉野広一氏は台湾と共通種といわれ^{※⑦}ヤエヤマトラと思われたり、ヨツスジトラの亜種になったこともあったが、それらとはまるで別物である。

る *Stenhomalus* sp. を1973と1974年に宮之浦のアグチ花上で採集された。これはちょうど、キイロメダカの上翅に黒紋の出たようなものと思えばよい。また、早朝と夕刻、タブの葉上を見回るというムモンチャイロホソバネの有効な採集法をあみだし、他に大きく水をあけた。

那須氏の1匹きりだったヤクシママルバネコブヒゲ[☆]も、1973年8月、小林敏男氏により石塚小屋周辺で3頭ほど得られた(氏はセミスジコブヒゲと思っていたそうで、まじめにやればもっと採れるかもしれない?)(屋久のセミスジは他地域のものとかなり異なり、これを *nasui* と間違える人はたくさんいたが、その反対はこれが初めて)。

この時、小林氏が大川林道にて *Zoodes* (クロモンキイロイエ) とオガサワラチャイロを4頭ずつ採ってきたことは、その立枯れがわかっていることもあり、多くの追従型カミキリ屋連を大川に招き寄せた。はじめは先例にならい、夕刻飛んでいるものを採っていたのだが、そのうち夜間立枯れを見回りだすと、なんとベタベタくっついていてではないか。 *Zoodes* はまだしも、オガサワラチャイロは多く、タブの立枯れ上でヒグナガヒメよろしく運動会をやっており、大珍品から一挙に暴落してしまった。

その他あげるならば、トゲウスバ3頭(杉野・藤田、屋久島産は四国のものに比べ、前胸のトゲが大きく頭部の溝が深い)、リュウキュウチビコバネがいくつか、キュウシュウトゲバメタメタ(入江氏など)。

これらの大戦果はもちろん採集法・技術の向上、知見の増大(それと入江氏)によるものが多いが、やはりそれだけでなく、あたり年であったことも加味されていよう。例をとるなら、今まで年間せいぜい1〜数頭しか採れなかったヤクシマキスジトラのその巨大な黒い姿は例年になく見かけ、計20頭余も得られたが、これはリュウブ・アグチの花に來たもの、伐採木、飛んでいたもの……など、従来となんらかわることのない方法で採れており、異常発生としか考えられないものであった。

隣りの口永良部島にもようやくカミキリ屋が訪れ(伊藤淳・守屋健二)、原記載以来のクチノエラブコブヒゲヤトカラヤハズ・シロスジドウボンなどが得られた。この島は屋久より大変交通の便がよい(宮之浦から毎日)ので、今後屋久の行き帰りに寄られることをお勧めしたい。

(9) トカラ列島

交通の不便などがたたり、ほとんど訪れる者もなく、空白地帯となっていたトカラにも1973〜1974年にかけ、草間・入江・清野・伊藤正雄・石田・小林・宮原氏らの有志連が入った(中之島)。

筆頭は清野・入江氏により9頭ほど得られたサタサビ?であろうか。

ところが、このサタサビ?は……清野氏の採集品を見て驚いた“なんでこんな所に *Palausybra* が入っているのだ?”と。確かにそれは *Palausybra* 属以外の何物でもなく、いわんや *Ropica* などではなかった。いや、よく見るならば、*Palausybra* どころかハネナシチビそのものといってもさしつかえない。伊豆特産のハネナシチビがなんでこんな所にいるのかはしらないが、察するにサタサビとハネナシチビは今まで、いずれもわずかしき得られていなかったため、比較されるチャンスもないまま見過ごされてきたのだらうか。

調べてみても、両者は同じものとしきれないようがない。Type-locality (佐多岬)の標本を見ていないので何ともいえないが、少なくとも今までトカラにおいて“サタサビ”と扱われていたものは現在の *Palausybra* に属するものと思われる。

新種らしきものも、もちろん(?)いくつか発見された。皮剥がして計20~30頭ほど得られた *Nortia* sp. やら、ミカンにつくというオキナワゴマフ系の *Mesosa* sp. やら、ツヤアラゲ・ムモンツヤアラゲに近縁な上翅にユニークな斑紋をもつ *Egesina* sp. (清野) など。

少なかったトカラコブヒゲ・トカラヒロウドは多く、2頭のみであったトカラヤハズ原亜種も少々、また、シバタアラゲサビ・チュウジョウトラ・ニッポンモモブトコバネ・ウスグロアメイロ・オビレ・ヒゲナガヒメルリ等々、20種近くの同島初記録種がもたらされ、トカラのカミキリ相解明は大きく前進した。

(10) 奄美諸島

奄美大島には相当多数の採集者が訪れているものの、マンネリ化がひどく、目新しい知見はほとんどない。

しいてあげるならば、低地(朝仁など)のクロマツが多い所にあるシイ花上でニイタカハナが多く採れたこと(海老原裕之・菅井道雄氏の発見による)、アマミアカハネハナが夕刻(5:00~6:00)のごく短い時間に好んでシイの花に飛来することがわかり、従来より多く得られるようになったこと、くらい。

これにひき比べ、唯一人1972年に続き4月と6月に徳之島入りした杉野氏はコゲチャヒラタ・ヒゲナガホソハナ・ニッポンモモブトコバネ・オガサワラチャイロ・フェリエヒロウド・オオンマクリイロシラホシ等初記録をはじめ、大きな成果をあげられた(この杉野氏の2年分の成果と高桑氏の採集品を基に76種のリストが作成されている※⑧)。翌春、さらに杉野・下村により、アマミアカハネハナ・タケウチヒゲナガコバネ・アラカワシロヘリトラ・シバタアラゲサビの4種が追加された。

(11) 沖縄諸島

本島において新種と思われるものでは、まず、かつて奄美大島湯湾岳にて唯一頭得られたのみだった通称「クビシロモドキ」の *Xylariopsis* sp. が江氏により7 exs(奥)。体型は上翅翅端がはるかに長くするどいことを除けば、ほとんどクビジロそっくり。クモノスモンサビのような色調がいかにも珍品げである。

南方ではネキと肩を並べて人気の高いスピニメゴビスも予想通り、1973年には計5頭与那覇岳周辺で発見された(1974年はゼロ)。アマミトゲウスバに近いが、よりグラマーで前胸背の突起は短い。

日本のスピニメゴビスは現在3種に分けられているが、よく決め手とされる前胸背の突起云々は長い短い傾向はあるものの相当に変化する。いずれも台湾の *formosana* と同様、*M. buckleyi* の延長線上にあると考えられ、石垣・沖縄・奄美・屋久・四国および九州でそれぞれ分化し、別亜種的な関係と思われる。

他には *Mimectatina* sp. (*M. ohirai* ☆ではない。一見 *Doius* 風という)・*Obrium* sp. (ハッタアメイロに近似)や初記録のイリエシラホシサビ(酒井案理氏)が大きく、ヤエヤマホソバネも沖縄のは別亜種といわれる。さらに数例のみであったリュウキュウモウセンハナ・ツマグロアメイロ(同島でウスグロアメイロといわれていたものは、もしかすると本種かもしれない)は、1973年以降、清野・小林氏らによりかなり多数得られた。

※⑧ 杉野広一・高桑正敏(1974)、徳之島のカミキリ、月刊むし39号

以上はすべて北部与那覇岳におけるもので、南部の記録はまだまだ足りない。以前から指摘されているように南部(および中部)の調査も欠かすことはできない。はなばなしい珍品こそ乏しいが、例えば北部ではめったに採れないキンケビロウド・ムモンアラゲサビ・ヒラシマケシ・シナクワなどは南部には少なくなく、また *Pseudale* や *Oberea* (アマミリンゴ?)・ムツボシシロが北部と南部ではその形態が異なるという問題もある。原記載以来知られていない、オキナワゴマフの原亜種など、もしかしたら南部に多いのかもしれないのだ。今後は、もうすこし広域にわたった調査が望まれよう。沖縄本島は広いのである。

春ものの採集なども従来と視点を変えることによって思わぬ成果があった例といえる。3月中旬に咲くシイの花は、今まであまり叩かれていなかったが、これで、原記載以来のオキナワチャボハナ☆・シバタヒゲナガコバネの別亜種と思われる *Molorchus* が採集され(与那演習林)、さらには *Epania* (クマタの系統)や *Clytus* (フーケンモドキトラ?)の不明種も見つかったり、インガキチビトラが採れたり、虫数は少ないが特筆すべきものが採れている。

今後、もっとも期待されるのは久米島および伊平屋諸島であろう。本島までが精一杯でこれらの島々まで行く人はなく、経験者の諸氏にやっていただきたい地である。

(12) 先島諸島

宮古島。人気のあるミヤコリンゴはその後多く採れるようになった。

リュウキュウヒメアマメイロ・ニセフトガタヒメ、そして特異なリュウキュウリボン(紋が青く、流れている)といった初記録種はいずれも多く、インガキゴマフに似た *Mesosa* の新種もかなり多数得られた。石垣・西表にもインガキゴマフに似た新種を産するのだが、これとはまた別のインガキゴマフに似た新種である(なんだかややこしいが)。♂は上翅から腹節がはみ出し、足がクモのように長いので、すぐそれとわかるが、♀ではこれといった特徴がない。面白いことに島の北部・平良市周辺では普通のインガキゴマフ(宮古のものはすこし違うが)しかおらず、友利・保良等南部では *sp.* のみと棲み分けている。

石垣島。新種と思われるもののトップは楨原寛氏により発見されたカラスザンショウの生葉にcomingという *Penthides sp.*。♂は黄色、♀は白色というなかなかエレガントなカミキリでオモト岳にて得られている。

変わったものがいくつかいる。平久保の低地でサキシマウスアヤに混ってススキより得られる、一見サキシマウスアヤそっくりな *Pterolophia* (?) *sp.* とか、オモト岳の山頂付近のゴザダケザサでのみ見つかる、他の日本産すべての *Bumetopia* と別系統と思われる緑色っぽい小形の不思議な *Bumetopia sp.* がそれ。(これは西表にもいるであろう)

ほかにも、ハッタアマメイロに極似する *Obrium sp.* (ハッタとは色がうすい黄色なこと、複眼がより大きいことで区別される一杉野氏)、*tsutsuii* 系の細い *Apomecyna* (これはほとんどの島に *A. histrio* と共に産するようだ)、*Ceresium sp.* (ヨコヤマヒメの近似種、奄美〜与那国にまで産す)があげられ、八重山両島で得られているキマダラ(稀)も別亜種と思われる。

珍品から下落したのもっともはげしかったのは、かつて「幻のカタモン」とまで呼ばれたカタモンビロウドで、入江氏により平地(米原〜荒川付近)のカラムシを後食している生態が見つけれ、一挙に多数が得られた。

コゲチャフタモンヒゲナガ・マツダクスベニ・ヤエヤマクロスジホソハナ等は比較的採集しやすくなり、春性カミキリの大物、ムネモンウスアオもオモト岳において3頭ほど採集された。

西表島。石垣島とおおかた同じ。しいてあげるならば、カンピラの滝・祖納岳などでベニボシがしだいにポピュラーになってきたこと(高桑・畑守国)。ヤエヤマヒオドシハナ[☆]・*Epania* sp. (アオヒメコバネ?)が何頭かカンピラの滝付近で得られたこと、など。

与那国島。翼上から見ると箱庭のような小島だが、日本の最南端にあり、日本ではここでしか得られないものが少なくないので、訪れる者が最近特に多い。

人気のあるデマシュウス(キマダラヒメミヤマ)は横山氏の初記録以降多く採れ(3~5月、ミカンのビーティング)、渋い珍品 *Diboma* (オキナワサビ)も1974年には夜間、竹垣を見回る採集法の発見と同時に格落ちした感がある。

初記録としてはアメイロ(*ssp. insularis*)・ニセフトガタヒメ(多)・ハッタアメイロ、新種と思われるものには、スキのビーティングで得られるアヤモンチビに似た *Sybra* sp.、や *Pothyne* sp. (2種)・前記の *Ceresium* などがある。

なお、この島のラベルが付いたヒオドシハナの標本があり、これから行かれる方は気をつけて頂きたい。

II 最近の傾向および問題点など

Iで奄美大島について記述しようとした時、はたと考えてしまった。何を書こうか全然浮んでこないのである。だが、それも当たり前。書くに価することが何もないのだから……

まだ未知の部分をたくさんもっている奄美なのに、ああも多勢押し寄せて、なんでこうまで漸新なニュースがないのだろうか……? 少し前の黄金時代の頃はブームとはいえ、今よりは少ない人数であれほど次々とビッグニュースがもたらされたのに。

これは単に後になったから、などというなまやさしいものでは決してない。ここ2~3年に訪れているメンバーが量的には増えても、質的には低下しているため、とでも言おうか。つまり、前に訪れた連中は(必然的なきらいもあるが)盲めっぽういろいろな採集を試み、むろん失策も多かったが、結果としては数々の面白い成果をもたらしたのである。しかるに、ここ2~3年の同島における採集者の生態(?)はどうであつたろうか。おどろくべし、10人が10人、20人が20人といってもよいくらいほとんどの人数がまったく同じ所へ行き、同じようなことをしている。こんな風に。まず、立ち入る所は八津野オンリー、やることはすなわち、ネキヤハレギヤクスベニなどをもっとも採りやすい尾根の吹き上げに陣どること。こうしてかつての採集者がみつけた尾根に皆なかよく並び、そして夜は夜でまたそこへ並んで灯をともしカワゾエイ(アマミトゲウスバ)を狙う。この間の行き帰りはすこし空白になるから道すがらをビーティングしたり、土場をみたり、近いから丸畑でもちょっと寄ってみるか……と、すこし大げさだが、ほほこれは現実なのである。よって、その収獲を見ていると驚くほど各人が似通っている(大きく分類すればだ)。

この採算第一というか、安全有利というか、合理的というか、これが定着したおかげでここ2~3年というものの、やれ今年はネキが多かった、やれハレギは少なかった、やれフェリエベニボシは……そんなニュースしか聞かれなくなった。

コゲチャヒラタ?・リュウキュウモウセンハナ?・フタツメイエ・リュウキュウヒメアメイロ・クロアラゲ・キイロアラゲ・モリヤシロオビチビ・クビジロモドキ?・イリエシラホシサビ・コブパネゴマフ・シバタアラゲサビ etc かって採れ、こことばかり採れていないものは多い。

この停滞現象は先人の行なったもっとも確率のよい採集法をただまねて、それだけ。の採集法についての1つの欠陥なのかもしれない。むしろ、初心者に変な所へ行けというのは酷だし(特に南の島は初めて、という人はある程度先人に聞いておかないとどうしようもない。本土とは勝手が違うのだから。)、多勢でワイワイやりながら名物のカミキリを狙う雰囲気は非常に楽しい。それはそれでまいたいのだが、何をやるにしてもやはり自分だけのオリジナリティを持っていた方が、楽しみもより倍加するというものではないだろうか。

人の行かない所で、採るカミキリが、みんな初記録と思いながら採っていくのもまた一興だし、自分で従来の資料・情報を分析してひそかに練っていた予想が的中、目標のものを手にした喜びなどは特に形容を絶する。

初めてそれを見つけるにはある程度以上の経験や技術がいるが、その後まねて採るのはごくやさしいことだ。虫屋の場合「一人前」とは前者をさす。ただし、有名コースによるものでも経験しておくことは大事である。例をとれば、対馬でオガサワラチャイロを採ろうとする時でも、オガサワラチャイロをまったく採ったことのない者と、大川林道で採ったことがある者とはたぶんその成功率はかなり違う。

話はもどるが、とにかく有名地集中で各人がいとも簡単に大きな成果をあげているかというところでもない。小さな場所に多くが集まれば、当然様々のつまらん弊害だって生じるのだ。(注:いろいろとえらそうなことを書きましたが、これで私と有名採集地で会われた場合、石など投げぬようお願いします)

ここで、最近の著しい珍品達の転落ぶりを追ってみよう。そのほとんどが一定のプロセスを経ていることに気付く。すなわち珍品といえど、繁殖を繰り返しているわけであるから、いる所にはいかな珍品といえどたくさんいるのであり、その環境・条件が他の優勢な種より厳しくかつ制限されるから滅多に採れない。したがって、従来の採集の場所や時期(あるいは時間)や方法をちょっと変えてみるにより、その条件が露見することは充分考えられ、これが珍品を下落させるための鉄理でもある。ここ最近の成果はすべてその結果とさえいえる。

これを“盲点”といった人もいる。黒田祐一氏のケブカマルクビの生態研究の報文の副題は「カミキリ屋の盲点」とあった。これはこのカミキリが今まで巧みにカミキリ屋の盲点をついていたため(早春という時期とネズミサシというへんな植物)、なかなか採集されなかったことを論じているのだが、ところが、

——その秋、岡山のY氏から寄せられたハガキにはこう書かれていた。「*Atimia* が秋にもネズミサシから採れました。新鮮な個体であること、複数得られたことで秋にも発生しているとしか……」

つまり、驚いたことにこのカミキリは一度ならず二度までもカミキリ屋の盲点をついていたのである。なんと頭のよい?カミキリであろうか。

これが南の島だと、こういう発見をできる率はさらに高い。

先の奄美大島を例にとるならば、従来の大珍品ニイタカハナが多数得られるようになったのも、ニ

イタカハナはツヤケシハナに近い → ツヤケシハナはモミヤマツなどの針葉樹を食う → ニイタカも
そうかもしれない → ならば、マツの多い所でシイの花をすくってみたらどうか、という点に着目し
たからである。また、アマミアカハネハナにしても、従来の試行だとなかなか採れるものではなかつ
たが、同じシイの花を夕暮れ時に見るというだけでその確率がぐっと高くなったのである（このよう
に南の島では、同じ花・伐採木・ピーティングでも時刻によって大差があることが少なくない）。

どうしたら採れるのか、といろいろ想像することは楽しい。1975年に向けての策として考えている
ものの中から1例を紹介すれば……

屋久島の *Nortia*。これはトカラで本属が発見されて以来、屋久にもいないだろうかという事が言
われてきたものである。しかし、*Nortia* のもっとも確率のよい採集法である倒木・立枯れの皮はが
し、夜間の立枯れの見回り、燈火採集が昔から相当行なわれているのにもかかわらず、まったく採れ
ていないことで、一時期待も醒めた。

そこへ今回の佐多岬における発見である。ちょうど中間の屋久だけぬけた形となり、これは何とし
ても採れそうである。それにしてもわからない。*Nortia* ならタブかシイの類の立枯れを夜間見回れ
ばよいわけであるが、大川であれほど試みたにもかかわらず、*Nortia* の *N* の字もでてこなかった。
と、思っているところへ K 氏より「佐多では *Zoodes* もその後採れているが、これは *Nortia* と棲み分
けをしていて同じ場所では採れないらしい……」というお話。

ならばなんとかこじつけられる。つまり我々のさんざん調べた 350 ~ 500m 地帯は *Zoodes* の棲家
なのだ。とするとこれより上か下かであるが、上とはまず考えにくい。すると残るは下ということに
なる。ということは屋久の *Nortia* は(いるとすれば)海岸およびその付近の低山に棲息していると思
われるし、これを試みた人も今までになさそうだ。そういえば、佐多岬も青島も海岸ではないか。

かくして、「屋久の *Nortia* は海岸および海岸べりの低山のタブ・シイ立枯れを、夜間見回れば採
れそう。候補地としては、栗生・永田など」といった結論(推論)が生まれる。

……これで的中するかどうかはわからないが、こんな案をいくつか考えていくうちに目的のカミキ
リが採れる日もくる。それに完全に外れたとも言いがたいではないか。いるのに採れなかったのかも
しれないのだから。

いま1つ若手(高校・大学生)の人達にお勧めしたいのは“もっと遠征を”ということである。もちろ
ん地元のカミキリを採ることは楽しいし、その分布を解明していくなどもおもしろくなくはない。

しかしよく考えてもらいたい。今日の日本の社会ではほとんどの人がいずれは就職して「社会人」
となるのだ。そうなったら、まず好き勝手な採集などできやしない。できるのは学生時代だけである。
その学生時代にしても、本当に自由な採集ができるのはたかだか3~5年であり、一生のうち、その
間でなければ馴めないものも実に多い。これに引き替え地元のカミキリは社会人になってからずっと、
つまりその10倍くらいも付き合う時間がたっぷりあるのである。となれば学生時代は社会人になっ
てからでは行きにくい遠方や外国にできるだけ行っておいた方が賢明というものであろう。これをし
ないで今、鬼のように後悔している新生社会人のグチはさんざん聞かされているので、これからの若
手にはそういう破目にならないでもらいたい。

「それでも俺は地元とその周辺のカミキリだけでよい」という声もないではない。まあ人それぞれの
好みに文句をつけるつもりはさらさらないが、そう言いつつも一たび遠征に出て、それにとり憑かれ

なかった人がいないのは不思議だ。

なぜだろうか？

その魅力进行分析すれば……誰でも虫を始めてまもなくの頃、つまり何を採っても何を見ても新鮮で楽しくてしょうがない時期があったと思う。が、このような初々しい感動は残念ながらそういつまでも長持ちしない。人間に「記憶」というものがある以上当然の結果だ。

ところが、南方へ行けば少なくとももう一度だけはその感動が味えるのだ。なんと素晴らしいことではないか。……かくしてこういう転生境を一度知った人は遠征から国外へと移っていくのかもしれない。

ともかく、イサヤ・ペテンダサンではないが、現代の社会において学生時代は人生最後のボヘミアン・ライフともいえるのだ。悔いのないよう。

60年代後半より始まった離島ブームは、70年代にはもはや空前のいきおい。ここしばらくはこれが続くと思われるが、次にくるブームはおそらく“台湾”であろう。1000種近くもカミキリがいるといわれる台湾、琉球を語るのに不可欠な存在。すでに一流どころは続々と訪台しているし、その他東南アジアをはじめ国際色も豊かになってきた。

国内にては、もう西表島は古いが、南・北硫黄島など最終秘境といえよう。(小笠原諸島において伊豆諸島における御蔵島の役割を果しているとしたら非常に興味深い)

Ⅲ 1973～1974年に記載されたカミキリ・ほか

ここ2年間における新メンバーは以下の通りである。形態上の特徴・野外における生態その他、私見を交えて簡単に解説してみたい。

1. *Eurypoda* (*Eurypoda*) *boninensis* Hayashi et Kusama (1974)

オガサワラヒラタカミキリ

Holotype: ♂, 父島扇浦, 10. VI, 1972, Y. Kusui leg. (in Kusama's Coll.)

Paratypes: 14 ♂♂ 7 ♀♀, 父島(境浦・扇浦・袋沢)

かつて竹内(1936)が“マツカワノコギリカミキリ”と報じ(母島)、その後、Gressitt (1956)・林(1959)により、*Eurypoda* sp. として扱われていたもの。

Eurypoda 亜属。つまり日本の本属でいえば、コゲチャヒラタの系統にあたる。コゲチャヒラタとは、1) ♂の大腿が大きなこと、2) 前胸前角があまり突出しないこと、3) 上翅の点刻が小さいこと(よって、一見して本種のほうがはるかに光沢をもつ)、4) 上翅の中央前より、翅端前にまで両側にある溝が見られないこと、5) 会合角がより鈍いこと、等の諸点で区別されている。

他にあげるならば、触角がコゲチャヒラタに比べ、やや短い。すなわち、♂ではコゲチャヒラタの触角が上翅中央を明らかに越えるのに対し、本種はほぼ中央にとどまり、♀ではコゲチャヒラタが上翅中央近くにまで達しているのに対し、上翅の約1/3ほど。

以上の相違は本種4 ♂♂ 2 ♀♀、コゲチャヒラタ(屋久島産)28 ♂♂ 7 ♀♀を基に検してみたが、その範囲内ではかなり安定していた。ただし、前胸前角では本種2 ♀♀のうち、1 ♀が鋭く突出しているのに対し(Paratype)、もう1 ♀はまったく突出せず、丸味を帯びていた。

今までのデータより推定するならば、成虫は5月から6月にかけて羽化し、6月以降に発生。コゲチャヒラタと同じく、倒木、立枯れの樹皮下に見られ(またおそらく、コゲチャヒラタと同じく、夜間は発生木およびその周辺を這い回っていると思われる)、燈火にも飛来する。

分布：小笠原諸島父島・母島

2. *Megopsis (Aegosoma) sinica savoryi* Kusui (1974)

ウスバカミキリ(小笠原亜種)

Holotype : ♀, 母島桑木山, 17. V. 1972 (材採集) ~ 16. VI. 1972 (羽化, 父島) Y. Kusui leg (in Kusama's Coll.)

Paratypes : 3 ♂♂ 2 ♀♀, 母島(桑木山)

以前より同地から記録のあったもので、原亜種とは前胸両側により長い金色毛をもち、上翅の毛がより長く密なことで区別されている。

小笠原諸島で朽木を崩していると、よく巨大な幼虫が出てくる。本種の幼虫であろうが、その割に野外において成虫を見かけることは少ない。

分布：小笠原諸島父島・母島

3. *Psephactus scabripennis* Kusama (1974) オガサワラコバネカミキリ

Holotype : ♂, 母島西ノ浦, 15. VI. 1972, Y. Kusui leg (in Kusama's Coll.)

Paratypes : 1 ♂ 3 ♀♀, 母島(桑木山)

コバネに似るが、色はより黒く、後脛節の広がりとは約半分。上翅はより長く、肩部はしわ状、点刻はより細かく密で、翅端へ向かい大きくなる。

分布：小笠原諸島母島

4. *Psephactus scabripennis chichijimensis* Kusama (1974)

オガサワラコバネカミキリ(父島亜種)

Holotype : ♂, 父島袋沢(材採集) ~ 28. VI. 1973 (羽化, 和歌山県), Y. Kusui leg. (in Kusama's Coll.)

Paratypes : 9 exs, 父島(袋沢)

原亜種とは前胸が上翅よりも規則的に細かく密に点刻されること、肩部がしわ状にならないこと、で区別される。

原亜種とも、1頭を除き、すべて枯枝より羽化した個体である。

分布：小笠原諸島父島

5. *Anoplodera (Pseudalosterna) aritai* (Ohbayashi et N. Ohbayashi) (1965)

オキナワチャボハナカミキリ

Holotype : ♀, 沖縄本島与那, 22. IV. 1962 (in Ohbayashi's Coll.)

今まで台湾のチビカタアカクロハナの亜種とされていたもの。

より長く先細にならない触角節、密集した点刻をもつより突出した前胸背板、細かな点刻をもつ比較的長い上翅(チビカタアカクロハナの上翅が基部の約2倍であるのに対し、本種は2倍以上)、より短い後足のふ節等で区別される。黄紋のより大きなことも1つのポイントとされているが、私の採集したものうち、1 ♂はほぼ翅端近くまで黄紋が拡大していた。

与那(演習林)および与那覇岳周辺のシイ等の花上で、現在まで20頭余が採集されている。(3月下旬)

旬～4月上旬)

分布：沖縄本島

6. *Leptura (Leptura) subtilis aureopubescentis* Hayashi (1974)

コヨツスジハナカミキリ (屋久島亜種)

Holotype : ♀, 屋久島小杉谷, 9. VII. 1963, H. Konishi leg. (in Shibata's Coll.)

生態図鑑にヤクシマヨツスジハナの♀として誤示されている標本が、本亜種のHolotype。この図鑑の写真および原記載でみるかぎり、コヨツスジハナの別亜種というより、むしろ、ヨツスジハナ屋久島亜種の1型ではないかと思われる。

分布：屋久島

7. *Paranaspia yayeyamensis* Hayashi et Yokoyama (1974)

ヤエヤマヒオドシハナカミキリ

Holotype : ♂, 西表島祖納, 30. III. 1972, K. Matsuda leg. (in Hayashi's Coll.)

Paratypes : 2 ♂, 西表島(カンピラの滝, 白浜)

従来、台湾のヒオドシハナと同一に扱われていたもの。

台湾のものとは触角が太いこと、前胸背板と上翅の点刻がより密なこと、体の色(特に頭部と足)が違ふこと等で区別されている。

かつてカンピラの滝で得られた1 ♂を見たが、台湾産が上翅が比較的短くピンク色に見えるのに対し、その個体は上翅が細長く暗紅色で、むしろベニバハナに近いようにみえた。

かなり稀なものらしく、上記のタイプ標本以外に数例を聞くのみ。飛翔中のもの、モチ?の花に来たもの(入江氏)などが採集されている。

本種が石垣島に産する可能性は高い。

分布：西表島

8. *Nortia kusuii* Kusama et Nara (1974) オガサワラムネスジウスバカミキリ

Holotype : ♂, 母島沖村, 20. V. 1973, Y. Kusui leg. (in Kusama's Coll.)

Paratypes : 1 ♂ 3 ♀♀, 母島(沖村)

アマミムネスジウスバに似るが、体はより暗い色、微毛がより密で、上翅の点刻は深く少ない。同じく、ムネスジウスバとも前胸背板がより丸味を帯び、上翅の点刻はより少なく、点刻が長円形でなくほとんど円形になることで区別される。

かつて鹿野(1930)・竹内(1935)がイエコミキリとして報じていたものは、おそらく本種の誤りと思われる。

私の知る記録のすべてが母島の沖村付近における燈火採集によるものである。

幼虫はギンネムを食害(児島, 1971)。

分布：小笠原諸島母島

9. *Obrium tsushimaenum* Hayashi (1974) ツシマアメイロカミキリ

Holotype : ♂, 対馬有明山, 14-17. V. 1971, H. Irie leg. (in Hayashi's Coll.)

Paratypes : 4 ♂♂ 3 ♀♀, 対馬(厳原・佐須奈)

サドチビアメイロと似るが、狭いが頑強な前胸背、それに前胸の前縁と後縁がほぼ同じ長さであること(サドチビアメイロは後縁がやや狭い)、体表面の点刻が異なること、より剛毛なこと、色が暗い

こと、等で区別される。

有明山・巖原・佐須奈・大星山など、ほぼ対馬全域で得られており、5月、各種花上に見られるが少ない。

分布：対馬

10. *Pseudiphra bicolor* Nara et Kusui (1974)

ムネモンアメイロカミキリ

Holotype : ♂, 父島夜明山, 11. VI. 1972, Y. Kusui leg. (in Nara's Coll.)

Paratypes : 5 ♂♂ 14 ♀♀, 父島(夜明山・境浦・三日月山・扇浦・ツツジ山)、母島(乳房山)

本邦産本属のウスグロアメイロ・ツマグロアメイロとは上翅の点刻が弱いこと、体色が異なることなどで区別されている。

頭部・前胸・上翅・足の色彩はかなり変化に富み、特徴の1つとなっている前胸背板両側中央にある1対の栗色紋も安定せず、消えかかるものまである。上翅では翅端へ行くにつれ微毛が密になり、肩部から上翅の3/5あたりまでくると、微毛がいきなり横から縦に生え変わる個所があり、肉眼で見ると一種の紋をつくっている。

なお、Villiers・中条(1971)の記載した新属新種 *Iriomoteus elegans* も、模式標本を見ていないのははっきりしたことは言えないが、石垣・西表島で得られている *Pseudiphra* の1種(沖縄本島の *P. obscura* は検していないが、石垣島・西表島のものは、奄美大島・徳之島・トカラ中之島産と比べ、前胸はやや長く、上翅の微毛ははるかに密で、*P. obscura* の別亜種程度が妥当)と同物のように思う。

成虫の最盛期は4~6月頃と思われる。各種広葉樹伐採枝のピーティングで得られるが、非常に俊敏で、すばやく押えないとほとんど逃げられてしまう。他の *Pseudiphra* 同様、花にも飛来する。

分布：小笠原諸島父島・母島

11. *Molorchus (Lino mius) nitidus* Obika (1974) ホソツヤヒゲナガコバネカミキリ

Holotype : ♂, 新潟県糸魚川市葛葉峠, 5. V. 1969, H. Hayakawa leg. (科博)

Paratypes : 17 ♂♂ 14 ♀♀, 葛葉峠および長野県上伊那郡(高遠・戸台)

本種の記載によって長年の *Molorchus* の混乱が整理されたといえよう。

今までウスグロヒゲナガコバネ・クロツヤヒゲナガコバネに近似の青い光沢をもつ *Molorchus*、といわれていたもののほとんどが、この新種に該当すると考えられる。美しい青色の光沢は生時、印象的であるが、死後しだいに落ちてゆき、約1年でほとんどが茶色っぽく変色してしまう。

外見上、最もまぎらわしいオダヒゲナガコバネと本種とを比べた時の同定のポイントとして次の特徴が簡単であるという(小比賀正敬氏の御教示による)。

1) 触角の末端はG(オダ)では釣状になるのに対し、N(ホソツヤ)ではほぼまっすぐであり、中には末端の11節目の先端がくびれて、いわゆる擬12節を形成している個体も見られる。2) 触角の微毛がGでは第5節目より密になっているのに対し、Nでは第4節目より密になる。3) 複眼はGよりNの方が大きい。4) 頭部の溝はGよりNの方が深い。5) 上翅はGよりNの方が長い。6) 全体的にザラザラした感じ→G、全体的につやがある→N。

また、本種とクロツヤヒゲナガコバネ(*M. hattorii*)が混同されることがあるが、クロツヤヒゲナガコバネは他のすべての日本産 *Molorchus (Lino mius)* が後腿節の先端約1/3が強くふくらむのに対

し、クROSSヤは先端から腿節の約2/3に至るまでがふくれており、一見して足が太くみえる。♂では特に触角がほぼ体長程度しかないという決定的な特徴をもっているため、間違えることはない。

ウスグロヒゲナガコバネ(*M. fuscipennis*)は Holotype がオダヒゲナガコバネと同一物といわれ、オダヒゲナガコバネのシノニムであろう。(Paratype の中には本種 *M. nitidus* が混っているらしい)

成虫は4~6月、カエデ類・コナシ・セリ科植物(対馬)の花上に集まる。幼虫はエゾエノキを食害(葛葉峠)

分布：新潟県葛葉峠・長野県上伊那郡・埼玉県秩父・東京都奥多摩・兵庫県下・福岡県英彦山・対馬

12. *Mesoereis koshunensis ohirai* Breuning et Villiers (1973)

ヒロオビオオゴマフカミキリ(八重山亜種)

Holotype : ♂、西表島舟浦、1.VIII.1968, H. Ohira leg. (仏博)

従来、台湾のものと同一に扱われていたもの。原亜種とは上翅の斑紋が異なること等で、別亜種とされた。

比較的稀な種で、やや古くなった倒木・伐採木の枯枝(太い部分)の裏側に静止しているものがよく得られる。

分布：石垣島・西表島

13. *Acalolepta ishigakiana* Breuning et Villiers (1973)

イシガキヒロウドカミキリ

Holotype : ♂、石垣島オモト岳、3.VIII.1968, H. Ohira leg. (仏博)

以前、石垣島においてヒメヒロウドに似た *Acalolepta* が得られたという話を聞いたが、本種はこれに該当するのかもしれない。写真で見ると一見アナバネヒゲナガ風である。

今まで石垣島・西表島方面へは多くのカミキリ屋が入っているにもかかわらず、カタモンヒロウド・キンケヒロウド以外の *Acalolepta* が見つからなかったが、これは8月3日という日付から考えるに発生期が遅いためかもしれない。

分布：石垣島

14. *Mimectatina ohirai* Breuning et Villiers (1973)

イシガキコゲチャサビカミキリ(仮称)

Holotype : ♂、石垣島オモト岳、3.VIII.1968, H. Ohira leg. (仏博)

石垣島のコゲチャサビを別種としたものと思われる。コゲチャサビの分布は広く、国内でもほとんどの離島に産し、色彩・斑紋はかなり変化に富む。今回、石垣島のものだけが独立種として記載されたわけであるが、別亜種程度の扱いが妥当のように思う。

分布：石垣島

15. *Rhodopina nasui* Komiya et Kusama (1974) ヤクシママルバネコブヒゲカミキリ

Holotype : ♂、屋久島辻峠、26.VII.1972, S. Nasu leg. (in Komiya's Coll.)

Paratypes : 2 ♂♂ 1 ♀、屋久島(石塚小屋)

マルバネコブヒゲの系統である。マルバネコブヒゲに似るが、体は黒く、細かい微毛でおおわれ、上翅の斑紋はむしろセミスジコブヒゲに似る。頭部と前胸にはまばらな点刻をもち、触角はより長く細い。那須敏氏により初めて採集された画期的な *Rhodopina*。

今までのデータから総合すると、発生期は遅く7月下旬～8月上中旬、1000m以上の高地帯に産し、モミの枯枝に集まる。

分布：屋久島

16. *Bonipogonius fujitai* Kusama (1974) ヒゲシロアラゲカミキリ(仮称)

Holotype: ♂, 母島評議平, 6.VI.1973, H. Fujita leg. (in Kusama's Coll.)

Paratype: 1 ♂, 父島(扇浦)

体は茶色。密に金色の微毛でおおわれるため、灰色にみえる。触角は♂で体長の約1.2倍、第3節と第4節の基半のみは乳白色でよく目立つが、この色は死後いくぶん汚れてくる。

♂のみで記載されたが、1974年には♀も得られた。♀は体かはるかに幅広く、触角は体長と同じかわずかに短いと推定される(両側とも第11節目がないので明記できない)。

同時に新属 *Bonipogonius* の記載がなされているが、この属はアメリカの *Eupogonius* 属および奄美大島の *Anaesogonius* 属に最も近いものである。

6～7月、イチビ等の新しい枯枝に来る。現在まで3頭のみ。

分布：小笠原諸島父島・母島

17. *Neosybra ryukyuensis* (Breuning et Ohbayashi) (1964)

ヤエヤマチビカミキリ

本島は最初八重山諸島から、林(1963)により台湾の *N. sinuicosta* として報告されたが、その翌年、同じものを Breuning・大林はヒメアヤモンチビの新亜種 *ssp. ryukyuensis* として記載した。今回、これを再度独立種として昇格させたものが本種である。

同文には *N. cribrella*, *N. costata*, *N. ryukyuensis*, *N. sinuicosta* の検索表が付され、Breuning が *N. costata* と *N. sinuicosta* をシノニムと提議している(1964)のに対し、上記検索表中の特徴より両種は別物であるとの見解を示している。

5～6月、シイ等の伐採木のピーティングで得られるが少ない。

分布：石垣島・西表島

以上の17種がここ2年間に新種・新亜種として発表あるいは昇格されたもの。

他に2)(下記)では、ツヤクシヒゲナガコバネを *Molorchus* から *Molorchoeopania* (ツヤクシヒゲナガコバネ属) に、またユアサヒゲナガヒメルリをキモンの一型扱いとしている。

北九州の昆虫(6)には、中根猛彦博士によりカッコウを除いた日本産 *Miccolamia* 属の再検討がされており、暫定的な処置として *M. verrucosa* Bates (1884) と *M. tuberculata* Pic (1918) の2種に分け、*M. glabricula* Bates (1884) は前者の亜種としている。

参 考 文 献

- 1) Keiichi Kusama, Hajime Nara, and Yoshihisa Kusui: Notes on Longicorn-Beetles in the Bonin Islands, 静岡大学紀要 Vol. 8, p. 117~135 (1974) <1~4・8・10・16の種>
- 2) Masao Hayashi: Studies on Cerambycidae from Japan and its Adjacent Regions, XX, 昆虫学評論 Vol. XXVI, Nos. 1/2, p. 11~17 (1974) <5~7・9・17の種>
- 3) Jiro Komiya and Keiichi Kusama: Two New Species of the Tribe Rhodopini from Yakushima Island and Formosa, 静岡大学紀要 Vol. 8, p. 137~140 (1974) <15の種>

4) Stephan Breuning et Andre Villiers : Trois nouveaux Lamiaires des îles Ryu-Kyu, Bulletin de la Societe entomologique de France 78 (1/2) (1973) <12~14 の種>

5) Masataka Obika : A New Species of the Genus *Molorchus* (Coleoptera, Cerambycidae) from Central Japan, 動物学彙報 Vol. 46, No. 3, P. 205~207 (1974) <11の種>

6) Takehiko Nakane : On *Miccolamia verrucosa* Bates and its allies, 北九州の昆虫 Vol. 19, No. 1 (1973)

ここ数年、とくにカミキリ界の動きは目覚ましく(というより目まぐるしく)、年間平均ほぼ10種のペースで新メンバーが追加されている。それまでの日本産カミキリをほとんど網羅した生態図鑑がアッというまに古くなり、さらにその後“最新版”と銘打たれた分布一覧表も、その印刷中にもう何種か記載されている、という有様で、すさまじいの一語につきる。

ここでは一覧表以降のカミキリ(11を除く)をすべて紹介してみたが、これですべてではない。文中にやたら、“新種”とか“sp.”とかいう単語が連発されたことでも容易に推察できるように、はたして日本に何種のカミキリがいるのか混乱した向きも多いと思う。

そこで、暇にまかせて「日本産未記載天牛リスト」を作ってみたところ、亜種を含めるとなんと60~70もあった。すると、日本のカミキリは亜種で数えるならば、約820~830ということになるのである。

新種という言葉も色あせてきたこの頃、ついでに一言つけ加えるならば、記載の時、とくに同定の相当まぎらわしいものは1種のみボツと書くより、Revisionのようなものを作って、その中に記載をおりこむようなものが有意義と思う。例えば、*Rhodopina*, *Acalolepta*, *Pseudale*, *Megopis* (*Spinimegopis*), *Pothype*, *Sybra*, *Ropica* など、そういったものが望まれよう。

* * * * *

原記載論文を翻訳していてつくづく感じたのだが、文章形態による種の特徴の表現には限界と欠陥がある。

例えば *Pseudiphra* の個所で触れた *Iriomoteus* にしても、文章に照らし合わせれば恐らく *Pseudiphra* であろう、と一応考えられるが、断言まではできない。より○○○、比較的×××、やや△△△、という言い方に代表される形容詞的な語句はとらえようによってはひどく曖昧な性質を有しており、例えば「密に点刻」といっても、「1平方mmに何コから何コまで点刻があるもの」といった基準がある訳でもない。文章ではタイプ標本の像を完璧に再成することは不可能なのである。

これが写真(か図)ならどうであろう。B5版の1ページに大きなカラー写真でも載せれば、瞬時にしてそのイメージのすべてが伝わる。文章で完璧に(近く)表現しようとすれば、きっとB5版に100ページも難解な文を弄しななければならない。そうして書く方はもちろん、読む側も大変な手間で、瞬時などというわけにはとてもいかないし、イメージの再現も写真よりは落ちる。

記載は写真(図)を主体に、などと言うつもりはさらさらないが、補足的な意味でも重要さは充分考えられる。

2



＜正解＞これは現在までの日本各地におけるカミキリのリスト完成度を表わす地図。斜線はすでにリストが一応作られている地域を示しています。

一見してわかるよう、西日本の方がよくまとまっており、特に中国地方は全国で最もよくまとまっているようです。四国・九州はまだの所が多い。これはデータ不足というより、むしろ整理されていない為で、近畿地方にいたってはこれがさらに極端。これらの地域については古くから愛好者も多く、記録はもう相当集積されているはずで、早いところ整理していただきたいものです。

中部・関東もまたしかりで、県単位の報告は少なく、東北となるとまるで未知の状態、北海道もそろそろ道内を統一した分布リストができていい頃……………。

* * * * *

1975年度から、本会では機関誌「ELYTRA」の他に第2会誌として「さやばね」を発刊いたします。

「ELYTRA」が先ゆき、原記載論文をはじめとする原著主体になってゆくのに対し、第2会誌「さやばね」では今回のように日本各地の甲虫リストや雑文的な記事を中心に編集してゆきたいと思います。特に当分の間要となるリストは毎号できる限り掲載し、残された地域をかたづけてゆきたいと考えておりますので、よろしく御協力の程をお願いいたします。

現在編集部にて計画している地区は東京都下・福島県南会津周辺・北海道ETCで、これらと平行して伊豆諸島・小笠原諸島・南西諸島などの島嶼も順次まとめていく方針であります。

（藤田 宏記）

（注）今回収録したリストはその地域に産すると思われるカミキリの6～7割以上をリスト・アップし、てあると考えられるものに限定し、それ以下の仮リスト的な報告は一応除外しました。

なお、今回は私が目を通すことのできたリストを紹介しましたが、この他にもすでにまとめられている所があるかと思ひます。御気付になった方は本会事務局まで御一報下されれば幸いです。

引 用 文 献

- 1) 長瀬良一・石田浩次(1970)：札幌産甲虫類について(Ⅱ)カミキリムシ科、HORNET No.8
- 2) 下山健作(1964)：青森県特に十和田湖周辺のカミキリムシの生態、昆虫学評論17
- 3) 京浜昆虫同好会カミキリグループ(1967)：日光とその周辺のカミキリ、INSECT MAGAZINE No.62
- 4) 久保田・渡辺(1973)：茨城県産カミキリムシ、るりぼしNo.1
- 5) 小倉暁雄・近藤茂昭：大菩薩嶺のカミキリ目録(1964)、INSECT MAGAZINE No.62
- 6) 福田惣一・鈴木義勝・海老原裕之・菅井道夫(1969)：大菩薩嶺総合調査報告カミキリ科、動植物研究会報第14号(日本大学農獣医学部動植物研究会)
- 7) 小宮次郎(1967)：奥多摩カミキリ目録、INSECT MAGAZINE No.70
- 8) 斉藤良夫(1962)：秩父地方のカミキリ科、秩父自然科学博物館研究報告 No.11
- 9) 草間慶一(1954～1955)：三浦半島中北部の天牛について、INSECT MAGAZINE No.31,

- 10) 草間慶一(1974) : 天城山およびその近傍のカミキリムシ、東海自然誌 No. 1
- 11) 野平照雄(1973) : 飛騨地方の鞘翅目(1)、御岳山系のカミキリ類、昆虫と自然 Vol. 8, No. 7
- 12) 田中忠次(1971) : 富山県産昆虫目録
- 13) 松枝 章(1968) : 能登半島のカミキリムシ、とっくりばち No. 12
- 14) 露木繁雄(1975) : 富士山周辺のカミキリ(本誌掲載)
- 15) 穂積俊文(1972) : 東海甲虫誌18報カミキリムシ科、佳香蝶 Vol. 24, No. 92
- 16) 大町文衛・山下善平・市橋甫・成瀬善一郎(1960) : 平倉演習林の昆虫相、三重大演報 No. 4
- 17) 辻 啓介(1972) : 兵庫県のカミキリ、月刊むし10号
- 18) 青野孝昭・宇野弘之・重井博・脇本浩(1970) : 岡山県のカミキリムシ、すずむし第19巻1・2号
- 19) 中村慎吾・小阪敏和(1970) : 広島県産のカミキリムシ、比和科学博物館研究報告 No. 13
- 20) 藤村俊彦(1966) : 島根県のカミキリムシ、比和科学博物館研究報告 No. 9
- 21) 三好和雄(1972) : 山口県のカミキリ、月刊むし15号
- 22) 林・溝口・日浦・西岡(1956) : 徳島県のカミキリムシ、昆虫科学 No. 4
- 23) 菅 晃(1970) : 小田深山を中心とする地域の天牛、*Ishizuchi* 1巻4・5号
- 24) 山岡幸雄(1970) : 成川溪谷の天牛、*Ishizuchi* 1巻1号
- 25) 楠博幸・菅 晃・山岡幸雄(1972) : 松山市湯山地域(石手川水系)の天牛相、*Ishizuchi* 2巻3号
- 26) 明石照男(1965) : 立花山山魂のカミキリムシ、筑紫の昆虫10巻2号
- 27) 田川宏・長尾丈七・神谷寛之(1959) : 福岡市付近産天牛科目録、筑紫の昆虫3巻1・2号
- 28) 今坂正一・岩崎伝次(1974) : 島原のカミキリ、北九州の昆虫20巻2号
- 29) 明石照男(1961) : 九重山の天牛類、筑紫の昆虫6巻2号
- 30) 榎原寛(1973) : 英彦山の天牛目録、筑紫の昆虫 Vol. 14, No. 1
- 31) 永井あつし(1970) : 宮崎県北部の天牛(1)、タテハモドキ No. 5
- 32) 坂元久米雄・嶋洪(1965) : 鹿児島県のカミキリムシ、SATSUMA 13巻3号

事務局からのお願い

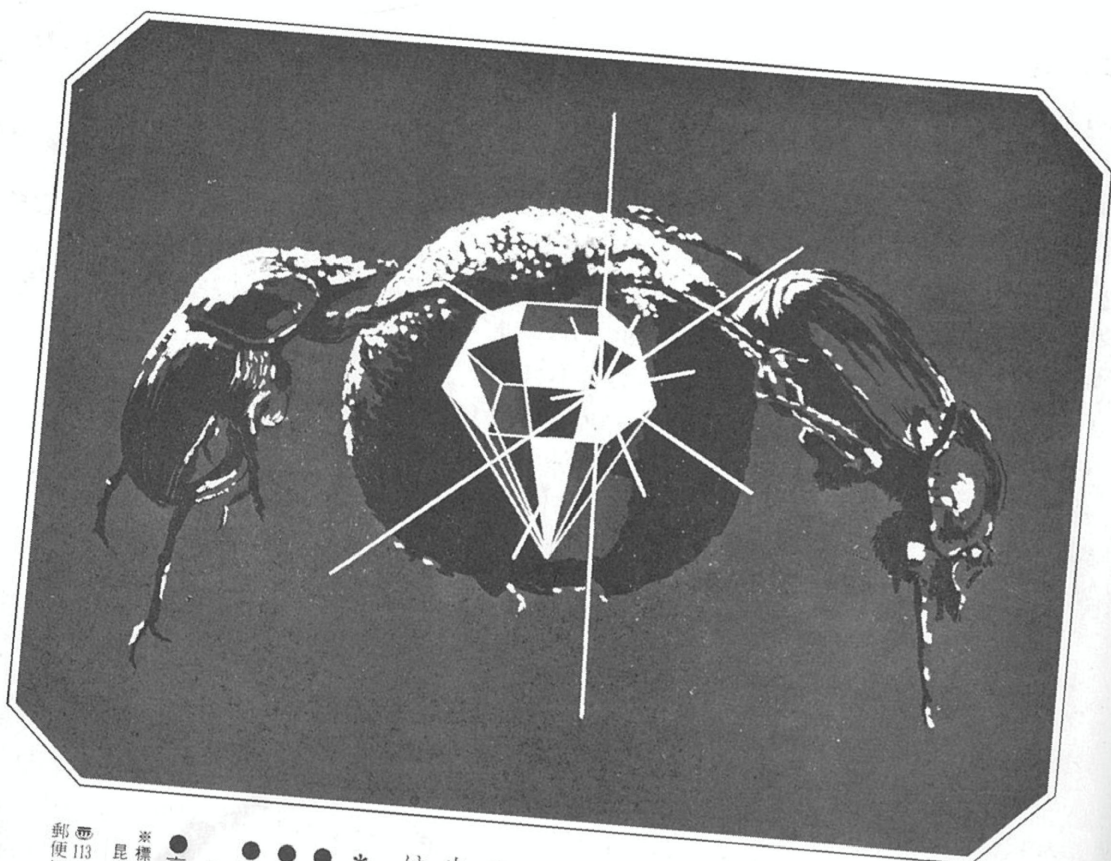
年会費の送金・住所変更など事務局へ連絡の際は、氏名の他に会員番号を必ず添えて下さい。事務処理がスムーズに行なえますので。

さやばね No. 1

昭和50年7月31日発行

編集 : 高桑正敏・藤田 宏 印刷 : 岩峰社

発行 : 日本鞘翅目学会(東京都台東区東上野4-26-8, 福田惣一方)



真珠より美しく ダイヤより価値がある 大切な標本を永久に守る 《ドイツ型標本箱》

自然はますます大切なものとなってきました。
この不思議な世界を解明する貴重な手掛りと
保存したいものです。
そんな願いをこめて、タツミ製作所では、昆
虫標本の保存に最適なドイツ型標本箱をお届
けします。

*すばらしい特長

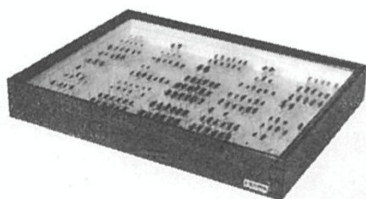
- くるいのこない良質な木材を使用
- 湿気や乾燥にも強い独特の構造
- パラゾールにも変化せず、標本がより美しく見える白色プラスチック底
- 高級ニス塗装の丈夫で美しい仕上げ

※ 標本箱のほか、展翅板など昆虫標本作成に必要な器材もあります。

昆虫器材カタログ、昆虫関係輸入図書・委託図書リストもあり。

〒113 東京都文京区湯島 二丁目二五番 〇三(八一) 四五四七
郵便振替 東京 一三 四七九

(有)タツミ製作所



大型
4,500円(送料別)

中型
4,000円(送料別)

この価格は昭和49年4月現在のものです